

エマの童話集



島さち子

エマの童話集

装
画

島

さ
ち
子

エマの童話集 第1部

のぼってきた足おと

はやおきをしたタロは、つめたい空気の、ずっと下のほうから、ちかづいてくる足おとに耳をすましました。

タロのおうちは五かいなのです。

トトトト、トン、トトトト、トン、かいだんをかけのぼり、ドドドド、ドドドド、すごいスピードでかけおりにいったのは、ケンのおうちにきた牛乳やさんでした。

すごいなあ、タロはくやしくなりました。

このあいだケンが、

「うちの牛乳やさんはチョウトツキューだよ。タロのうちの牛乳やさんは、のろのろ牛さ」

と言っていたから……。

タロはつぎの足おとをまっています。タン、タン足おとがすこしずつ上にのぼってきました。タロのうちにくる牛乳やさんです。

のろまなのかな？ なまけものなのかな？ タロはベッドから飛びおきました。げんかんのドアをあけてみました。

牛乳やさんは、びんをかちかちいわせ、ふうっ、ふうっ、ふうつと、白い、いきをしています。た。

牛乳やさんはおじいさんでした。

タロは元気のいいこえでいいました。

「がんばれ！　がんばれ！　牛乳やさん！」
牛乳やさんはっこりして手をあげました。

けれども、やっぱり、下におりるときも、タン、タン、タン、ゆっくりかいだんをおりていきました。のろまなのかな？　こまるな？　タロはおもいました。

ある日、タロのおうちになかなか、牛乳がはいたつされませんでした。タロはパンがノドにつかえて、コンコンせきをしました。

そのとき、かいだんのずつと下の方に、コツンと、足おとがしました。またコツンと足おとが

しました。ずいぶんゆっくりしていて、なかなか上に近づいてこない足おとでした。

「だれだろう？ のろまだな。うちの牛乳やさんよりのろまだな、タロはおもいました。まだ上がってくるようでした。コツンときこえ、またコツンときこえました。そのつぎのコツンはずっと近くにきこえました。ドアがドンとなりました。タロはびっくりして、げんかんにでてみました。」

そこには、小牛がいつとう、丸い目に、一つぶなみだをうかべていました。

「おじいさんがいなくなつて、牛乳はいたつができなくなつたので、それでえ、わたしが変わりにきました」

小牛が小さな声でいいました。

「牛乳はどこにあるの？」

タロはききました。

「わたしはメウシです」

小牛がいいました。

「それで牛乳はどこにあるの？」

タロがききました。

「わたしが大きくなつたら牛乳をしぼってください！ あなたのおうちにずっといますわ」

小牛はすこし元気をだしてというと、四本の足にスリッパをはきました。でも、スリッパがぬけ

そうで、ちっともあるけません。

ほんとにのろまだな、だけど、こんどはずっとおうちにいるんだもの、のろまでもかまわないさ。タロはおもいました。

ゲタはいた！！

タロは、青いロケットのもよものついたゲタを、おばあちゃんからかってもらいました。生れてはじめてゲタをはいたタロは、うれしくて、

「ゲタはいた！ ゲタはいた！！」

と、いいながら外に出ました。

ゲタのハナオで、足のゆびのあいだが、少し重たいみたいですが、足はピョンピョンとびはねました。

「だれかいなかなあ」

大人がいそがしそうに歩いているばかりで、こどもは見あたりません。

「うふふふ、ゲタはいた！」

タロがふしをつけてうたつても、だれもふりかえりません。

タロはピョンピョンはねながら、だんちに来ました。だんちには、いつも子供がたくさんあそんでいます。サンダルをはいた女の子がいました。

タロのゲタはこんこん音を立てました。

「うふふ、ゲタはいた」

タロは大きい声でいって、ちよつと片足を上げて見せました。

女の子は目を丸くしてタロとゲタを見ました。タロはうれしくなつて、

「うふふ、ゲタはいた。ゲタはいた！」

といつてピョンピョン歩きをしていきました。

女の子が後からついてくるのがわかりました。タロの足音のほかに、後から足音が聞こえましたから……。

男の子が三人いました。よごれたズック靴のかかとをふんでいる子もいました。

「うふふ、ゲタはいた！」

タロはゲタの裏の方までみんなに見えるように片足を上げてみせました。

男の子たちはうらやましそうにゲタを見つめました。

タロがますます元気よく、

「ゲタはいた！」

と歌いながら行くと、後からタロのゲタの足音のほかにいろんな音がしてきました。

ふり向かないでもタロには、みんなが自分の後ろについてきているのだとわかりました。

タロの行く道には子供が大勢いました。

アイスクリームを食べていた子は、アイスクリームがとけてしまうのを忘れて、タロのゲタを見ました。

タロの足音のほかに、後からいろんな音がして、子供がいつぱいいついてくるのがわかりました。

タロは「ゲタはいた」というのに変えて、

「ゲタいつぱいになあれー！ 百になあれ！」と叫びました。

そのうち、だんだんタロのおうちが近くなってきました。

……お友達は、百人？ イヤ、もっと大勢なんだから……、タロはちよつと考えました。

「ぼくのおうちのおおきくなーれ！」

叫んでタロがピョンととびはねた時、かたほうのゲタがすーっと空にとび上がりました。

そのとき、わあっと、おおぜいの子供の声がしました。

「あーした、天気になーれ！！」

くつやサンダルが空いつぱいに飛び上がりました。

それは、タロのゲタをせんとうにして、おうちに帰る小鳥のむれみたいでした。

くつやサンダルもタロのゲタのように、黒い点々になるほどに遠くにとんでいきました。

「帰ってくるさ、帰ってくるよ！ 帰ってきたとき、みんなゲタになってるさ！！」

タロはいつて、後ろをふり返りました。

いつのまにか、子供たちはいなくなつて、向こうに、だんちが白くかすんでいました。

秘密の花園

真紀君がペチュニアの植木鉢をかかえて、うちから出てくるのを、ランちゃんが見つけました。まきくんはあわてて植木鉢を後ろにかくし、困った顔で言いました。

「ランちゃん、うちのママに告げ口しては駄目。絶対駄目だよ！」

マキくんはランちゃんの手をとり、ランちゃんの曲がらない小指に、マキくんの小指をからませ、指きりをしてしまいました。

「ね、かわりに、あそこの草藪の中に連れてってあげる。ほんとさ！ 蛇がいっぱい遊んでいるよ。蛇の白い卵が10個あって、この間なんか、そのうちの一つから、あかちゃん蛇が赤い舌を出していたよ」

「ほんと？」

草藪は、葉屋さんの隣りの曲がり角にある空き地で、ランちゃんの背より高い草が、ぼうぼうと生えています。

でも、草藪はトゲトゲのいっぱい生えた針金で囲まれていて、誰も入ったことなど、ないみたいに草と草が葉っぱをかさねて、地面は真っ暗なのです。

「いつも僕はここから入るんだ」

まきくんは道端の溝を跨いで、一箇所、トゲトゲの針金が弛んでいるところを揺すって見せました。

「わたしも入ってみたいなあ。蛇の卵って見たことないんだもん」

ランちゃんはほんとに蛇のいそうな草むらだと思いました。いつか蛇のなくような不思議な声を聞いたことがあったのです。

「ランちゃん、こわくなって泣いちゃいやだよ。蛇がびっくりして卵を持って逃げるかもしれないな

いから」

「わたし、泣かないもん」

ランちゃんはきっぱり言いました。

草藪の中は、むんむん、葉っぱの匂いがいっぱいです。

ランちゃんは草の根や茎のからみ合った所につまづいて転びそうになりました。

その時。土のうえに白い丸いものを見つけました。

「これが蛇の卵？」

ランちゃんがきくと、マキくんは、

「そうさ！」

とって笑いました。それは渦巻模様のカタツムリの殻でした。ランちゃんは殻をポケットにしまいました。

風がさっと吹き、草の葉っぱが目刺さりそうです。

二人が目をばちばちした時です。葉っぱの重なりの間をすかして、ずっと、ずっと奥に真っ白いまん丸の玉が見えたのです。

まきちゃんは大きい声で叫びました。

「あ、あれ、あれが蛇の卵だよ、きつと？　ほんとに蛇がいるんだ、逃げよう！！」
ランちゃんもまきちゃんの後から大あわてで逃げました。

草の森をくぐり抜けると、ひよいと、明るい空が開けました。

そこは、狭いけれど草がなく、まだ朝露の乾かない黒い土に、百日草の赤い花が一本咲いていました。まきちゃんはっこりしました。

「ここ、ぼくの秘密の庭だよ」

まきちゃんは、大事そうに持ってきた植木鉢からペチュニアを土といっしょに引き抜いて、百日草の隣りに植えました。

ペチュニアの花びらは、ところどころぼろぼろになっていましたが、植木鉢の時よりも、ぱつときれいに、輝いてみえます。

「ねえ、わたしも仲間に入れてよ！」

ランちゃんはがまん出来なくなっていました。

「誰にも黙っているんならね。なにしろヒミツなんだから」

まきちゃんは大人みたいに、ランちゃんを頭の上の方から見下ろしました。

「ヒミツまもる？」

今度はランちゃんが、まきちゃんのあまり曲げてくれない泥んこの小指と指きりをしました。

ランちゃんはペチュニアの隣に、おじいさんのランの花がほしいなあと思いました。

「ヒミツの花園ネ！」

「ああ！」

まきちゃんの泥んこの手が、鼻をこすっています。

暖かい風がやさしくペチュニアと百日草をふるわせ、足元で動いていた虫が、ランちゃんの靴に触れて、コロコロ、玉になりました。

エマの童話集 第2部

ヤンマとエンマ

姉のヤンマが部屋を覗いた時、妹のエンマは白い毛布にくるまっていました。

「あなたには、いろんな天分があるのに、もったいないなって、いつもパパとママが言っている

わ」

ヤンマは妹を毛布の上からピタピタたたいて言いました。

「わたしが天分を持っていてるんですって？ 天分って何かしら。揺れている世界でじっとしているって大変なことよ。わたしがこうしているのは、何をしていいかわからないのに、お姉さんはどうして動いてるの？ 何のために生まれてきたのか分からないのに何を信じて、確信に満ちて、希望に満ちていられるのかしら？」

「もしかしたら、それは力のこめかた、力学的な問題なのでしょう！」

ヤンマは言いました。

「わかってるわ、力を抜いて土台に重さを托しているわたしは、きっと姿を消しているのよ」

二度目にヤンマがエンマの部屋を覗いた時、エンマはベッドの上ではなく、ベッドの脇の壁の面にうつぶせに寝ていました。

「ほうら、どうかしら、天分を發揮しているのよ！」

ヤンマは肩を竦めて部屋からでました。

三度目にヤンマが覗いた時、ベッドはもぬけの殻でした。びっくりしてベッドの下や壁を見ました。すると、天井から声が降ってきました。

「ほうら、どうかしら、天井に寝るって気持ちのいいものね」

エンマは天井に背を貼りつけたかたちで、寝ていました。

「まあ、手品なんでしょう。磁石でも持っているのかしら？　ふざけるの、なしよ！」

ヤンマは長い間天井を見上げて首が痛くなりました。

ヤンマが四度目に覗いた時、エンマは部屋の中央の空間に寝ていました。

「ほうら、どうかしら、空間は最高ね、ふわふわしていて、天分を發揮するなら此処だと思うわ」
ヤンマはにんまりしました。

「見て！　本当に地球の引力から解放されているのよ。天分を發揮しているのよ！」
エンマもにんまりしていいました。

五度目にヤンマがエンマを見たのは朝焼けの空を飛んでいる姿でした。白い毛布をだるそうに時々ゆったりと動かしているのが、白鳥の品位に似て、エンマに相応しいと思いました。

「でもね、相変わらず横になったままで怠けているのね」
とヤンマは思いました。

夕空になって、六度目にヤンマがエンマを空に探したとき、エンマを見つけることはできませ

んでした。

「横になっていて、もし眠ってしまったら、落ちてしまって、エンマは天分を發揮できなくなるじゃないの。ベッドがなくては、かわいそう！」

ヤンマはエンマの部屋にいつてベッドに向っていいました。

「あなたにも天分を發揮してもらわなくっちゃ、エンマが可哀想よ！」
「ぐう、ぐう」

とベッドが鳴りました。

「へんねえ、寝息みたい？ 呑気なベッドねえ、ご主人さまは何処？」
ヤンマが聞くと、エンマの笑い声がひびきました。

「わたしの天分に、おねえさん騙されたのね！！」

ネモチヤン

ネモチヤンは門柱にもたれて、ママの帰りを待っていました。

道路には誰も見えないけれど、アスファルトの上にテンテンと足跡が見えました。

「誰の足跡かな？」

よく見ると、はだしの足跡みたいです。

「小さいから子供だわ。誰かな？」

ネモチヤンが足跡をたどっていくと、足跡は、足を揃えて立ち止まり、それっきり消えてしまいました。

「急に消えちゃった！ へんね。ここからどこへいったのかなあ？」

ネモチヤンがさがしていると、ネモチヤンのすぐ横に、足跡が現われて、ピヨコピヨコふえました。

「あなた、だあれ？」

答えも姿もありません。

「へんだなあ」

ネモチヤンが歩き始めると、

「あれっ！」

足跡はまるで友達みたいにネモチちゃんと並んで歩き始めました。

走ると、走り、止まると止まりました。

「足跡さん、どっちにいくの？」

ネモチヤンは聞いてみました。

すると足跡は、一歩、二歩、ネモチヤンの前に出ました。

足跡さんの行く方に行ってみようかな。ネモチちゃんは思いました。

ネモチヤンは足跡を見失わないように、目をぱっちり大きく見開いて歩いていきます。

そのとき、誰かが、後ろからネモチヤンの肩を、

「とん、とん、とん」

と、たたきました。

ネモチヤンはびっくりして振り向きしました。

誰もいません。

「わかった！ コラコラくんでしょう？ わたしをぶって何処に隠れてしまったの？」

でも、コラコラくんは見えません。ネモちゃんは考えました。

コラコラくんだったら、もっともっと強く叩きます。

コラコラくんはいたずらばかりして、コラ、コラ、コラって叱られてばかりいるから、コラコラくんになりました。

ネモチャンは何でも欲しがって、あたしにも、あたしにも、にもって、赤ちゃん言葉で、アタチュ、ネモ、ネモって連発したから、ネモチャンになったんです。

ネモチャンがへんな気持になって辺りを見まわすと、何時の間にか見たことのない町にきていました。足跡を気にして、下ばかり見て歩いてきたから、気がつかなかったみたいです。

足跡とネモちゃん、二人の進んでいく両側は木がいっぱいしげっている森でした。

まただけれが、

「とん、とん、とん」と、ネモチャンの背中をたたきました。振向かずに、ネモチャンはたたかれた場所を手でさわってみました。なんだかざらざらしているみたいです。

「あっ、そうかあ！ 足跡が、ネモチャンの肩に登って降りたのね、右手だから、きっと右に曲がれって言っているんだわ」

右手には道はなくなつて、全くの草ぼうぼう、深い森に続いているようです。

「行き止まりよ。ほんとにこっちなのか？ 足あとさん！」

ネモちゃんは立ち止まって言いました。

「ネモチャン、透明人間の声が、聞こえるのかあ？」

何時来たのか、コラコラくんが不安そうな顔で聞きました。

「足跡さん、足跡さん！」

ネモチャンが大きな声で呼んだ時です。

「ご、ごうっ！！」

それに答えるような強い風が吹きました。

ネモチャンとコラコラくんは強い風に吹き飛ばされ、必死で木の枝につかまりました。

木の葉っぱが、ざわざわと動き、幹までぐらぐらしています。

「ネモチャン、変だぜ。木の幹が、地面に吸い込まれていくぞ。早く木に登るんだ！」

コラコラくんは幹に抱きついて一生懸命お尻や足を動かしています。

木がゆっさ、ゆっさ、ゆれながら下に沈むので、木登りのできないネモチャンは、

「助けてえ！」

と叫ぶしかありません。

「大丈夫、ここは、U F O エリアさ！ ……おい、地球人がびっくりしてるぞ。木に化ける練

習は中止だ！」

誰かの声がきこえました。

ネモチャンたちのつかまっている木の枝がすうすうと消えて、幹がどんどん下に沈んで行きま

す。

いいえ、地中に沈んで行くのではなくて、木の背丈が短くなったのです。

「あれ、れれれ！」

気がつくと、ネモチャンとコラコラくんは、銀色のうろこを持った変な動物におんぶされています。

そして、目の前には金色の毛むくじやら、鼻の黒いたぬきみたいな顔、胴は銀色のうろこ、足に青いリングをはめた、変な動物が立っていました。

「UFOが、着陸に失敗して、故障しましてね、困っています。でも此処は安全ですよ。ここはUFOエリアですから」

その動物が言いました。

ネモチャンとコラコラくんは草の葉っぱに乗っかって、ふんわり地上に降りました。

「UFOエリアだって？」

ふたりは一緒に聞き返しました。

「僕ら宇宙人！！」

木だった動物がいました。足の模様が赤か、黒である他は二人の宇宙人は同じ形です。

「僕らは地球をよくするためにBBPP星雲4477番星からやって来たんです！UFOの300m以内がUFOエリアです。僕の足跡について来てくれてありがとう！ 着陸時の事故で、

ぼくらはUFOエリアから出ると、姿が見えなくなり、声も出なくなってしまうんで困っていたんですよ。こんなことじゃあ、地球人に理解して貰えるはず、ないじゃありませんか！」

足跡が宇宙人だったなんてびっくりです。

ネモチャンと、コラコラくんに向かって、レーザー光線みたいな、いろんな光がパツパツと来ています。

「読み取り完了！」

「入力完了！」

「全員集合！」

小さいのや、大きいのを、痩せたのや太ったのや、いろいろな宇宙人がネモチャンたちの周りを取り囲みました。

「わたしは、キャプテンのアスキュー。百瀬幸太郎君と二条もなちゃん、間違いないかな？」
キャプテンがいました。

「あれっ、どうして、知ってんの？ だれもそんな呼び方してないのに？ ぼくコラコラくんさ、幸太郎なんていわれると優等生になったみたいで、くすぐりたいよ！」

本当にくすぐったくなかったのか、コラコラくんが鼻の頭をこすりました。

「そうよ、わたしだって二条もな、なんて呼ばれたことないわ。ネモネモと連発したからネモチャンなの」

ネモチャンもいうと、キャプテンは苦虫を嚙みつぶしたみたいな顔になって、

「読み取りミス!!」

と叫んで、いくつかのボタンを、ちかちかと叩きまくりました。

「ガガーン」

と、音がして、またさっきの光が、ネモチャンとコラコラくん集中しました。

集まっていた宇宙人たちは、声をあげて、身をふせたり、飛び上がったりにして、光をさけました。

ネモチャンのかみの毛は立ち上がって、ハリネズミみたいです。コラコラくんの帽子は舞い上がって、天井に張りついてから横ばいしています。

「らんぼう過ぎますぜ、キャプテン！ われわれは、地球をよくするために来ているんです。荒々しいことをしては、目的と反対の結果にならないとも限らんでしょうが……」

年配の宇宙人が、キャプテンをいさめるようにいきました。

「いや、失礼。しかし、らんぼうに抜うと、ときに故障部分が、なおったりするもんでね！」

キャプテンは足で機械を蹴りあげました。

「われわれは地球人の個人データにこだわっているんだよ」

キャプテンはうるこにつやのない、中くらいの宇宙人です。ベルトのボタンをこんどはそっと一つ押ししました。宇宙人たちがみんな下に降りて静かになりました。

「ネモチャンと、コラコラくんのおかげで、無事、地球人のデータを採取できました。それは、これからみんなでテストしよう。さ、リキュー、指導なさい！」

リキューというのは、足跡さんです。

「それでは、まず、かわいいネモチャンから勉強しよう！」

リキューは大声でいってから、ネモチャンに向きなおり、くま取りしたぎよろ目でじっと見つめました。

「さあ、ごらん！ ネモチャンは、ほっぺが丸くてピンク色！」

「ネモちゃんは、ほっぺが丸くてピンク色！」

円になっている宇宙人は声を合せて叫び、ベルトのボタンをカチカチ、カチとたたきました。

「ね、ごらん、ネモチャンせんせのおしりには、しっぽはなくて、リボンがひらひら！」

「しっぽがなくて、リボンがひらひら！」

「ネモチャンせんせのおててには、うろこがなくて、宙ぶらりん」

「おててには、うろこがなくて、ちゅぶらりん」

リキューは、ネモチャンのデータを読み上げるのに、一生懸命です。

他の宇宙人たちも一生懸命学習していました。

「ネモチャンばっかり！」

コラコラくんが、ぷりぷりしています。

「ドンドンドンドン、ドド、ドロロ……チカ、チカチカチカ」

リキューはベルトのボタンを、低く、たかく、激しく、ゆるく、叩きました。

宇宙人たちは興奮して、ざわざわ動きながら、それぞれのベルトのボタンを打っています。

「ん、まあー」

ネモチャンは声を上げました。

どうでしょう。宇宙人たちはいつせいに変身しました！！

ネモチャンに似せて変身したみたいなんだけど……。

「あら、いやだあ」

ネモチャンがくっくと笑いました。

鼻の頭の黒いニセネモチャンは、あわててボタンをたたき、鼻の頭を赤く変えました。

「赤じゃない！」

ネモチャンはふんがいました。

その隣のネモチャンはいやだなあ。しっぱはそのまま、顔はけむくじやら、ブラウスのしたから、おへそが出ています。

そのとなりのネモチャンはひどいこと、スカートをはいていない。

その隣のネモチャンは洋服がうしろまえ。

「みんなネモチャンと全然違うわ!!」

ネモチャンは笑いながらいました。

「いやはや、UFOの故障が影響しているのかな？ それとも僕のデータ入力が……。いや、みんな違うところをみると、どうやら、きみたちのミスだろう！ さあ、みんな、ようく、ネモチャンをごらん。はやく、ネモチャンそっくりになること！ きみたちはみんな、44777星人なんだ、いいか、誇りを持って!!」

リキューがいうと、みんな、しんけんな顔でネモチャンとベルトのボタンを交互に見つめました。

「はいっ！ ド、ド、ド、ロロ……カチカチカ！」

またみんなが、ネモチャンに変身しました。

「よし！ では、今度は、コラコラくんだ！」

キャプテンがいました。ようやく、出番の回ってきたコラコラくんが、のっし、のっしとみ

んなの輪の中央に立ちました。

「ぼく、コラコラくんです！」

いうと、胸をはって宇宙人を見回しました。

「へんなコラコラくんに変身したりしたら、承知しないぞ！ ぼくいじめっ子なんだからな！！」

「いじめっ子？ いじめっ子って、何んだらう？」

宇宙人のなかから、声があがりました。

「いじめっ子！ いじめっ子！ いじめっ子！」

宇宙人がささやいています。

「さあ、ごらん、コラコラくんは、ほっぺが四角で、きずだらけ！」

キャプテンがいうと、

「ほっぺが四角で、きずだらけ！」

宇宙人はいっせいに声を張り上げました。

コラコラくんはあわててほっぺを手でこすりました。

「ね、ごらん。コラコラせんせのおしりには、なーがい尻尾が、ぶーらぶら！」

「なーがい尻尾が、ぶーらぶら！」

ネモチャンがびっくりして見ると、コラコラくんのベルトが尻尾のように、たれています。

「コラコラくんの体には、脂肪がのって、ブクク、ブク！」

リキユーが身長、体重、胸囲……を打ち込みました。

コラコラくんはプリプリしてリキユーの尻尾を引っ張りました。

「こら、こら！」

キャプテンがコラコラくんを押えましたが、ときはおそく、リキユーはもんどりうって、倒れていました。

でも、引っくり返っても、なお、リキユーは仕事を忘れません。

「コラコラせんせのお靴には、あおむし3匹すんでいる！」

「……あおむし3匹すんでいる！」

みんなは嬉しそうに声を合えました。

ネモチャンはこのとき、やさしい風が過ぎていったような気がしました。宇宙人はあおむしに、やさしいみたいです。

「チカ、チカ、チカ」

ふと、みると、ネモチャンの前に五人のコラコラくんが立っていました。

「みんなよく出来たな。それでこそ、任務を遂行できるぞ。われわれの計算では、地球上の生物に変身している限り、UFOエリア以外でも、姿、声をもつことが出来るとわかっている。地球人になるのは、この要領でいけ！ 忘れないように！」

キャプテンは、大満足でいいました。

「はっ、はっ、は、よく出来すぎて、どれがほんとのネモチヤンか、コラコラくんか分らなくなつてしまったな。ああ、ほんものは輪のまんなかだったな……。本物のコラコラくとネモチヤン、どうもありがとう！」

キャプテンが言うと、みんな、頭に手を上げました。

「それ、ネモチヤンのお辞儀だったら、まちがいよ！」

ネモチヤンがいうと、みんなそろって、頭を下げました。

ネモチヤンはよくわからないけど、とてもいいことを、してあげたような気がして嬉しくなりました。

でも、ちょっと、ほしいな、とネモチヤンは思いました。

ほんもの以外のネモチヤンには、まだ、洋服の下に、ベルトのボタンがあるような気がします。あれがほしいの！！

「わたしにも、わたしにも、にも、にも、ネモ、ネモ、ネモ……」

ネモチヤンの声が、UFOエリアに、こだまして、ひびきわたりました。

「やーい、やーい、ネモチヤンの、ネモネモが始まったぞ！ やーい！ やーい！ やーい！」

コラコラくんが叫びました。でもコラコラくんはひとりではありません。

「ネモチヤンはいったって、何だってほしがるんだから。だから……から、から、から、ら、ら、ら……」

あっちでも、こっちでも、おなじことを叫んでいます。

1人、2人、∞人、4人、5人、コラコラくんはいっせいに野球帽を投げ上げ、飛び上がってキヤツチしました。

五人ものコラコラくんは、憎らしい時のコラコラくんです。

たくさんの家来を引き連れているみたいに、いばりくさって、声を合せています。

「何人ネモがいたって、ぼく、ごまかされないぞ！ ネモネモって甘えているのが、ネモちゃんにきまつてるさ！」

「わたしだって、わかる！ ほんもののコラコラくんは……」

でも、ネモチャンは、8人いるけれど、話す言葉はひとり。コラコラくんのほうはネモチャンのほうより、オツチヨコチヨイなのか、物まね好きなのか、動作も、話すことも5人一緒です。

「わたしだって、わかるわ。コラコラくんは、いちばん憎たらしいからわかるもん！！」

ネモちゃんだって、負けてはいません。

「じゃあ、どれか、あててごらんよ、よ、よ、よよ！！！」

ネモチャンは五人のコラコラくんのまわりを、ゆっくりと回りました。

ほんとうにうまく、変身している、しっぽの出てるのや、鼻の黒いのなんか、一人もいません。

おでこや、膝小僧のかすり傷まで同じです。

「あっ、そうだ！ コラコラくんのベルトは、はずれてぶらぶらだけど、シャツの中のベルトに

ボタンはない筈よ！」

ネモチヤンは、コラコラくんのシャツのお腹の辺りを、ちよつと、つついてみました。コチン。ボタンがあります。

もうひとりのコラコラくんのおなかも、コチン。

3番目のコラコラくんも、コチン。4番目のコラコラくんもコチン。

5番目のコラコラくんにきまりです。

「ほんものの、コラコラくんは、これ!!!」

ネモチヤンは指さしました。

「けっけっけっ、けっ、け」

コラコラくんはみんなそろって下品な笑いかたをしました。

「こらこら、きみたち、そんな、品のない笑いかたをしてはいけないな。いくらなんでも地球人になったからといって、それでは、地球をよくする目的を達成することは出来まい!!!」

キャプテンが、目の周りの、銀色の毛をパフパフさせて、いいました。

「はい！ すみません、悪いことは最小限にすることを、誓います！」

五人のコラコラくんは宇宙人らしく甲高い声でいいました。

「へんねえ！」

ネモチヤンは、5番目のコラコラくんのお腹をちよつと、つつきました。コチン。

「うわあ、みんな、ボタンをもってる？」

ネモチちゃんはびっくりしました。

「コラコラくんばっかし、ボタンもらったんだわ！！ わたしにも、わたしにも、ニモ、ニモ、ネモ、ネモ、ネモー！！」

ネモチちゃんは、コラコラくんがうらやましくて、さっきの、5倍も、10倍も、大きな声で叫びました。

そのときです、ひとりのコラコラくに止まっていたテントウ虫が、ネモチちゃんのかたに止まりました。

「あら、可愛い虫！」

ネモチちゃんは、ふっと、ほしかったものを忘れて、テントウ虫を手の上において、にっこりしました。

「へんだなあ、変わった地球人もいるのかな？ 地球人は自然を破壊し、動物や、植物をぎゃくたいしているって、地球から助けを求める泣き声が、44777星に絶え間なく届いて来るんだ。

そこで、われわれは、地球人に自然を愛する心や、動物や、植物の身になってものを考える、聡明さや、やさしさを、取りもどさせるために、やって来たんだよ！」

キャプテンがネモチちゃんを見つめながら、考え深げに首をふりました。

「そうめいさ、やさしさだって……？ へんなの？」

コラコラくんが不満そうにいいました。

「ぼくは勇気や、たくましさが好きさ、好きさ、きさ、きさ、きさ……」

5人のコラコラくんが同時に、ガンマンみたいにピストルを発射する真似をしました。キャプテンがリキューに手を上げて合図しました。リキューの手が、右手にいるコラコラくんのベルトに、そっと、ふれました。

あれっ、きがつくと、ネモチャンの耳に、テントウ虫が、耳かざりみたいにぶら下がっていました。

「宇宙にはテントウ虫はいないが、地球にきてから、データをインプットして、変身することが可能になったんだよ」

リキューがいました。

そのときです。小さな小さな声がしました。

「そうさ、ぼく、変身したのさ。ボタンを打って、自分でテントウ虫になったんだよ」

コラコラくんの声です。

「ん、まあ、コラコラくんばかり、いいの！！ ネモチャンにも、ネモチャンにも、にも、に

も、ねも、ネモ、ネモ……」

ネモチャンはコラコラくんがうらやましくつてたまりません。がまんなんて、いや！！

「なんでもいいわ、ばけてみたいの！」

ネモちゃんの目が夢見ていました。

「しかし、地球人が変身した場合、もとの姿に、もどれる、ほしよはないので……」

リキューが口ごもりました。

「うちにいるとき、お姉ちゃんと同じものをほしがると、パパもママも、いい子だから、いい子だからといって、がまんさせられちゃったの。でも、ネモチャンはいい子じゃない。ほんとよ、テントウ虫なんか、ひねり潰しちゃうんだから！！」

ネモチャンの耳に止まっていたコラコラくんは、びっくりして逃げだしました。4にんのコラコラくんは、テントウ虫を追い駆けていきました。

キャプテンは、ネモチャンの腰の上にボタンの一杯ついた、ベルトをペタリと貼り付けてくれました。

「いまのところ、トンボとテントウ虫と毛虫とミミズが、かんたんなところだよ。ちいさいものになって、その気持を知ってみることだ！」

キャプテンはいいました。

「わたし、毛虫なんかいやよ、ミミズなんて、きみが悪い。トンボ、あかいトンボがかわいいわ。」

青空をすいすい飛ぶの!!!」

その時、トンボがすいすい飛んできて、ネモチヤンの胸に止まりました。

「さあ、ネモチヤン、トンボをよく見て!」

「しっぽが赤いわ目がくろくて、グリーン、グリーン。羽は透明、すてきな網目」

「そう、ボタンのABCDEFGHIJK<<<<>>>>>>>」

リキューは銀色の毛を切り揃えた手首から、金色の長いくちばしのような爪をだして、ネモチヤンのボタンを押してくれました。

「こんどは、わたしがボタンを操作します!」

といったとたん、ネモチヤンのおなかの温かい真っ赤なスカートが、トウガラシみたいに細くなりました。

「あれ、れれれれ! わたし、まだ、ボタンにさわっていないのに!」

あわてているネモチヤンの手は、たちまち、透明になり、バリツと、横に突っ張りました。

ああ、目が回る、目が回る。足は上についているのか、下についているのか、何本なのか、ちつともわかりません。

「あっ、あっ、あっ、あっ」

ネモチヤンは叫びながら、とんぼ返りをくりかえし、やっとのことで、なんとか、スイスイ飛べるようになりました。

「小さな虫が、どんな暮らしをしているのか、味わうことだ。そうすれば、地球人がどういう態度でいるべきか、わかってくると思うのだが……」

キャプテンが言っています。

ネモチャンは、スイスイ空を飛びました。

いつのまにか、UFOエリアを出て、夕空を飛んでいました。夕日がとてもあかるいのですが、不気味な、鳥の影が過ぎます。

「ほらっ！ くちばしだけじゃなく、足もつかいなさい！！ 迷いトンボくらい取れなくて、どうするのよ！」

黒い鳥の声です、お母さん鳥が赤ちゃん鳥に教えていました。

トンボを狙っている鳥の目がいくつもいくつも光っています。黒い鳥の赤ちゃんがネモちゃんトンボをめがけて、突進してきます。

「危ない！」

ネモチャンは宙返りして、急降下しました。

コラコラくんと一緒に、テントウムシだってよかったのに……。でも、コラコラくんはテント

ウムシだから、トンボよりよく飛べないかもしれませんが。ネモチャンは夕焼けの光りをすかして、お腹のボタンを確かめました。

きょうのところは人間にかえりたいわ。<<<<>>>K J I H G F E D C B A、トンボになる時の反対におしてみました。でも、だめ！！

ネモチャンは透きとおった羽をピンと合せました。

「ネモチャーーン！ コラコラクーン！ ネモチャーーン！ コラコラクーン！」

どこか下の方で、呼んでいる声が聞こえました。

人影は、だんだん近づいてきています。

パパとママ、こんどは、オネエチャンも。

ネモチャンは一生懸命そっちに向かって飛びますが……、もうだめです。動けません！
ついに力尽きて、落ちました。

トンボのネモチャンは死んだように眠りました。そして、羽の上の朝露がかわくと、また家に向かって、とびました。

パパはちょうど会社にてかけるところです。

「わあ！ いい天気だな！」

空を見えています。

「飛んでいるのは、ただのトンボじゃない、ネモチャンよ！！」

ネモチャンはパパの頭の上をグルングルン回って、だんだん下に降りていきます。

パパは空を見るのをやめて、すたすたと駅に向かって歩き出しました。

ネモチャンが昨日、帰らないで、あんなにさがしていたのに、ネモちゃんがいなくても、パパは平気で、とても元気みたいです。

「やだなあ、パパ。こっちを見てよ！」

ネモチャンは空から声をかけますが、何度声をかけても見てください。

「えーいつ！ すいすいすいの、くるりっ！」

ネモチャンはパパの目の前に舞い降りました。

「おや、赤トンボか。秋だなあ！」

パパはいいながら、通り過ぎてから振りかえりました。

あれっ！ ランドセルをかついだネモチャンが家の門から出てきました。

「やだあ、あれは宇宙人よ！」

ネモチャンは叫びましたが、パパには聞こえないみたいです。

ネモチャンはパパの耳にとまり、

「パパ、わたしが、ネモ……」

といいかけた時です。パパったら、さっと、大きな手で、ネモちゃんトンボをつかまえてしまいました。

ネモちゃんは羽を押えられて、身動きできません。

パパは、

「ワツハ、ハハハハ」

笑っています。

「おおい、ネモちゃん、赤トンボをつかまえたよ。学校にもって行って、虫ピンで止めなさい！！！」

パパは、ニセネモちゃんが追いつくのを待って、笑いながら、赤とんぼを手渡しました。

「パパ、いけないわ。トンボを殺しては、地球のためによくないよ！」

ニセネモちゃんはいうと、トンボを見る間に手ばなしてしまいました。

「ハツハツハツハツハツハツ、ハツハ、ネモは理科がすきなんじゃなかったっけ？　パパはお医者さんになってもらいたいとおもっていたんだよ！」

パパはニセネモちゃんの頭をなでながら、いいました。

「お医者さんになることは、地球のためになると思うんだがな？」

パパは残念がっています。

「人間もトンボになれば、トンボのことがよくわかると思うわ」

ニセネモチャンがいつています。

「ぼくだって、子供の頃は、いろんなものになりたいと、夢みたものさ！」

パパはニセネモチャンと手をつないで、とても楽しそうです。

「今は？」

ニセネモちゃんがパパをのぞきこんでいます。

「きょうのネモは、ちよっと手ごわいな！ ハッハッハッハッハ」

ネモチャントンボはニセネモチャンの耳にとまりました。そしていいました。

「わたし、ほんとの、ネモ！」

「フーン」

ニセネモチャンは鼻に皺をよせてからいいました。

「このトンボ、パパにつかまえて、ほしいんだって！ パパ、わたしは、むかしのネモが、やってみたいに、糸を結んで飛ばしてみたいの！」

パパはニセネモチャンの耳から、またも、ネモちゃんトンボをつかまえました。ニセネモチャンが糸を取り出し、ネモチャントンボの胴に食い込むほど強く結びました。

「ほら、苦しいでしょう！ さあ、お空を飛んで！」

ニセネモちゃんは、ネモちゃんトンボを空にむかって、ほうり上げました。

ネモチャンは、逃げようと一生懸命になりました。でも、突っ張って、よく飛べません。

「ほら、くるしいだろう！」

ニセネモチャンはパパから糸のはしを受け取ると、ネモチャンの腰が千切れるほど糸を引きま
す。

「あつ、そうだ、ネモチャンがいらんなら、コラコラくんにあげようかな？ 彼なら、とつても喜びそうだけど、ああ、だめだ。コラコラくんには研究心がないんだ。そうだな、標本を作ってる知り合いの子供にでもあげることに、しよう！」

パパはネモチャンが苦しがつているのにへっチャらで、糸をつけたまま、紙で三角に包みポケツトに入れてしまいました。

ひどいパパ、ひどい宇宙人ネモ！！

「死ぬよ、死ぬよう！ パパ！ トンボが、ネモだってば……、トンボだからってひどいわ！ たすけてよー！」

ネモチャンが、いくら、わめいても、もう、どうすることも出来ません。

下手に動いたら、糸が巻きついてしまいます。

大空をすいすい飛べるとおもったのに……。

パパはニセネモチャンとわかれて、駅のプラットホームに立っているみたいです。
ネモチャントンボは、涙もかれはてて、虫の息です。

「あっ！」

誰かが、どしんと、体当たりしました。パパが、びっくりした声を上げました。

そのときです。ほんの少し、ポケットが開いて、紙のなかが、ぼっと、明るくなりました。

「なんだ！ 幾らも入ってねえなあ。なんだこりゃ。汚いテッシュなんか、ポイだ！」

どうやら、パパのポケットから、小銭入れを誰かがすりとったみたいです。

いっしょにネモトンボまでつかんだのでしょうか。

ネモチャンはテッシュに包まれたまま、プラットホームに横たわっていました。

靴が、ネモチャンの羽を踏んでいきました。

「いたーい！」

こんどは、靴先で蹴とばされたみたいです。

なんか、ティッシュペーパーが、ごそごそ、音を立てています。

「……虫みたい……わたし、トンボが虫に食われてるとこ、みたことあるよ」

誰かが話しています。

ネモチャンはもう半分死んでいるみたい。

「ごそごそごそ、がさがさがさ、ごそごそごそ、がさがさごそ」

ネモチャンは目をつむっていました。

「ぼく、けむしだよ」

ええっ！ けむし？

「毛虫さ、ほら、ちょうちよになる毛虫だよ！」

そういえば、毛虫はちょうちよなんだわ。ネモチヤンはおもいました。

「毛虫さんが紙をかじってくれたの？」

「はやく、紙からでるんだ！ 踏まれないうちに、はっばにとまれ！」

ネモチヤントロボは、毛虫に助けられて、ようやく葉っぱに止まることができました。

どれくらいたったのでしょうか。ネモチヤントロボは、目を開けました。

トロボの複眼で360度見えました。

ここは、駅前、大勢の人が、いたり、きたりしています。

あっ、コラコラくんの友達の三太や、正ちゃんがいる。

あっ、小さなテントウムシを囲んでいます。コラコラくんだわ。きつと。

コラコラくんは羽をむしられてる、ああ、すっかりむしりとられちゃった！

今度は赤のマジックインキをぬられています。

かわいいそうに！ 三太たちは、けらけら笑いながら、学校の方に向かっていきました。

あんなに元気だったコラコラくんが、コンクリートの上で身動きもできないでいます。

ネモチヤンはありったけの力をふりしぼり、さっき飲んだ朝露を、管をのぼして、テントウムシのコラコラくんにふりかけました。

車が、凄いい勢いで上を通り過ぎました。

排気ガスで頭がくらくなりました。

ネモトンボの赤いしっぽも、コラコラてんとうむしの黄色い羽も、油でよごれています。もう命は長くないのかもしれないかもしれません。

人間はじぶん勝手！！ ネモチヤンはおもいました。

「コラコラくん！ 飛び立つのよ！！ 飛び立つよ！！」

ネモチヤンは、糸を引きずって全身の力をあげて飛び立ちました。

「ママ！ ママならトンボになってもネモチヤンだと、見分けてくれるわね！」

ネモチヤンは身体の痛みを我慢しました。

そして、一度登ってみたいと思っていた、公会堂の大木のテツペンに止まりました。

白い雲が空をゆうゆうと流れていきます。

みんな、小さく、小さく見えました。

ネモチヤンの家の赤い屋根が見えてきました。留守なのか窓も玄関のドアもぜんぶ閉じています。

ママもお姉ちゃんも帰ってきません。

ニセネモチャンはどこへ行ったのでしょうか？

ネモチャンは待ちくたびれて、何回もとんぼ返りをしました。そのときです。植え込みから、小さな声がしてきました。

「ぼ、ぼくだよ、コラコラくんだよ」

そこには、小さな灰色のテントウムシがいました。

「どうしたの？ 赤く塗られたと思ったのに……」

「ぼくはね、飛ぶのよ！ 飛ぼうよ！ といった、ネモチャンの言葉を、決して、忘れない！ あれで、元気になれたんだから。だんだん力が出てきて、動けるようになった。それで、家に帰えったんだよ。そしたら、宇宙人のコラコラくんがいてね、ママが、ぼくを掃除機で吸い取ったのさ！！ もう、息が出来なくて、きたなくて、こんどこそ、死ぬかと思ったな。ママったら、『お、気味悪い、いやな虫！』っていったんだから。ぼくが、ぼくの部屋にいただけなのにさ。ぼく、ママに、テントウムシに変身したぼくを見て、びっくりして欲しかっただけなのに……」

灰色のテントウムシは咳こんでいます。

「かわいそう、シャワーを浴びたらいいのかも。でもネモチャンだって、パパに殺されるかと思っただよ」

ねもちちゃんが、パパに採集され、虫ピンで止められるところだった話をしました。

「ほんと、ぼくなんか、つぶれちゃってる。人間に戻りたいなあ！もう一度、UFOエリアにいったって、キャプテンに、たのんでみようよ？ 虫って、たいへんだもんなあ！！」

コラコラくんはいままで、見たこともないほど、真面目くさっていました。

「コラコラくんのママも、うちのパパも、いちど虫になってみたらいいのよ！」

ネモちゃんが考え深そうな目をしていました。

「ぼくみたよ、宇宙人がすっかりぼくになってるとこ！」

話しながらネモチャントンボと、コラコラテントウ虫はUFOエリアにむかいました。少し飛んでは、葉っぱの上で休みました。

でもやってきたところは校庭でした。二人とも、学校を休んでいるのが気になっていました。

「わたしたちのクラスをちよつとのぞいて見ましょう。先生なら助けてくれるかもしれないから……」

ネモちゃんがいました。

教室では、うわっ、ニセネモチャンとニセコラコラくんが、先生と並んで教壇に立っているではありませんか？

「ネモチャンもコラコラくんも、また100点満点とりました。すごいなあ！ さあ、みなさん、二人はどうしてこんなに成績がよくなったのでしょうか？ じゃあ、聞いてみましょうね！ ネモちゃんから、話して下さい！」

先生がいました。ニセネモちゃんが目を寄せて、ネモちゃんトンボをみ上げました。

「わたし、トンボだいすき。ことに赤トンボがすき！ だから、トンボに糸を結んで飛ばしたりしません。でも、ネモは今まで、平気でそんなことをしてきたんです。虫の立場なんて考えて見たこともありませんでした。でも、わかったんです。本当にトンボになって、糸を結ばれて、引っ張られて。自分のしていたことが、どんなことなのか。わかったんです！ それに、わたしたち、試験になると、ベルトの……」

ネモちゃんトンボははずかしくなって、白い糸をひきずって、逃げ出しました。

「ベルトのボタンを叩いたなんて、ニセネモちゃんはいうのかしら？」

「ぼく、言うと思うよ。宇宙人は勇気があるもの。ほんとのことを言って、みんなをびっくりさせて、感心させて、ネモちゃんも、コラコラくんも学校中の人気者になるさ！！」

コラコラテントウムシが、遠くを見るような目をしました。

どこかで、ネモちゃんを呼ぶママの声がしていました。

もう、UFOエリアは、すぐそこです。

やさしい王さま

ポワンはお兄ちゃんのアワンと、庭の草とりをしていました。

「うわあ！」

アワンが大声をあげました。

草をとったあとのかわいた土の上に、白いボタンのようなものが、いくつも、いくつもころがっているのです。

よく見ると、くるくる、うずまきになったカイで、中はカラッポでした。

「大昔のカイだよ、まっ白だ！」

白いカイはうすくて、中のほうまで光りがすきとおって見えました。

「大昔？」

ポワンは聞き返しました。

「そうだよ、大昔、この庭は、海だったんだ！」

「本当なの？」

「そうさ、カイのカラーが、こんなにいっぱいあるんだから、土の中には、もっともっと、たくさんあるよ、きつと！」

お兄ちゃんのアワンはじしんまんまん得意ました。

この庭が、むかし海だったなんて、ポワンはびっくりしてしまいました。

海といえ、広くて、広くて、青くて、水ばかりのところ。

お魚さんが、スイスイおよぎまわっている、ところなのに……。

夢みたいなおはなしだな、ポワンは思いました。

アワンはどんどん土を掘っていきます。

ポワンも、どろんこになって掘りましたが、カイはもう出てきません。

「パパ、うちのお庭、昔、ほんとに海だったの？ カイガラがたくさんあったよ！」

アワンとポワンは白いカイガラを、パパの大きな手のひらの上のせて聞きました。

「ほう！ これは、これは……。庭にあったの？ みんな死んだのか？ かわいそうに！！」

「かわいそうって？」

アワンが聞きました。

「かわいそうって、かたつむりがこんなに死んだからだよ！　このお庭には、パパが子どもころから、二年まえまでは、たくさんのかたつむりがすんでいたんだ。きみたち、気がつかなかったか？　ちかごろ、見えなくなったなあと思っていたら、みんな死んでしまっていたんだね！」

　パパは悲しそうな目をしていました。

「これ、かたつむりなの？」

　ポワンは目を丸くしてパパに聞きました。

「うちのかたつむりはね、みんな右まきだった。これ、ほら見てごらん、右まきだろう？　かたつむりのカラはうすい。海にいるカイは、もっとかたくて、あつくて、じょうぶだ。かたつむりはね、この庭の水はけがよくなって、前みたいに、じめじめしていなくなったから、生きていけなくなったらしい！　町に下水道ができたせいだろう。かわいそうに……」

　パパはパソコンのでんげんをきりながら、立ちあがりました。

「そうだ、おはかをつくってあげよう！　もっと、かたつむりのカラがあったら、集めておいで！　もっと大きいかたつむりだっているはずだが？」

　ポワンとアワンは白いカラをさがして、パパの掘ったあなに、うめました。

　パパはその上に小さな石をのせました。ポワンはおはかにおまいりしながら、思いました。一
びきくらしい、生き残ってるかたつむりだって、いるんじゃないかな！

ポワンは庭のすみの、暑さでぐったりしている、アジサイの葉っぱのかげをさがしました。

「かたつむりさーん！ かたつむりさーん！」

大きな声で呼んでみると、何かが、がさりと動いたような気がしました。

気のせいかな？

ポワンはぐったりしているアジサイに、じょうろで水をあげました。

しゃあしゃあ、水が葉っぱの上をながれました。

「ああ、ありがとう、ありがとう」

そのとき、小さな声が聞こえました。

「だあれ？」

ポワンは声のしたほうを見ました。

「わしじゃ、かたつむりじゃ！」

「えっ？」

見まわしても、だれもいません。アジサイの葉っぱのかげにも、とりのこした、草のなかにも見あたりません。

「わしは、おぬしの足もとにおるわ！」

ポワンは足もとを見ました。

ポワンの頭より大きいコケのはえた石の下から、によつきり首をだしているのは、かたつむりさんみたいでした。

「この大きな石の下に、かたつむりはいるんだよ！」
アワンがしんぱいしています。

「わしは、年をとって、死にそうなんじゃ！ おぬしらに水をかけてもろうて、ようよう、角がでた。おかげで、気分ソウカイじゃ！！ しかし、わしの仲間たちは、みんな死んでしまいうたらしいの？」

かたつむりは、息を大きくすいこみました。

「わしは、かたつむりの王さまじゃ！！」

かたつむりの王さまは、すつくと長い二本のやりをたて、かすれた声でいいました。

「王さまじゃから、わしはリツパで、大きなごてんにすんでいるんじゃ。すこしはたくわえもあつた、それで、水がなうても、なんとか生きのびて来れたんじゃが、ひとりぼっち！ 待っても、待っても、だれもむかえにきてはくれない！！」

「待ってるって、だれを待っているんです？」

ポワンは膝をついて、王さまに顔を近づけていきました。

「王子を待っているんじゃよ！ 王子は家来をつれて、すみよい国をさがしにいった。二年前の

ことじゃがの。わしの仲間はずがのろいから、なかなか進めないのじゃろう。くろうしているにちがいない！」

「で、王さまは、歩けるんですか？」

お兄ちゃんのアワンが聞きました。

「歩けるなら、わしも、王子たちと一しよにでかけていったさ。知っているか？ この町はからにかわいて、としよりのかたつむりの歩けるところなど、どこにも、なうなうなうたわ。かたつむりは歩くとき、しるをだして、すべるように這っていくんじゃが。そのしるが、この町では、からからにかわいてしまうのよ!!!」

「それって、パパの言ってた、下水道が出来たせいかな？ それとも、雨の降らないせいかな？」

アワンがポワンをふりかえって、首をかしげました。

さっきまで、しおれていたアジサイが、水をすって、いくつもの、小さな空いろの花びらをひろげ、目の前で、スローモーションのえいぞうみたいに、ゆっくりと立ち上がっていきます。

「かわいそうだなあ、かたつむりの王さま!!! 石の下なんだよ! 石を取っばらうてあげようか？」

お兄ちゃんのアワンが、指をなりました。

そのとき、ばりばりっと音がして、ぬうっと、かたつむりのやりが、目玉をのせて、のびあがったんです。

「あっ！」

王さまは、ぐるりとあたりを見まわしてから、声をあげました。

「わしの黄金のごてんは、どこにいったんじや？ わしのごてんが……。ぴっかぴっか、輝いていた、黄金のごてんが見えない！！」

「そんな？ 王さま、黄金のごてんなんか、どこにもないよ！」
ポワンはいいました。

「王さま、黄金のごてんなんて、どこにも見あたりませんよ。石の下でもない、草のなかでもない、しおれたアジサイの花のなかにもありません！！」

アワンがりょう手を広げてから、首をすくめました。

「どろぼうにやられたんじや、そうにちがいない！ しかし……」

王さまは、首をちぢめ、つのも、やりも、目玉も、みんなひっこめてしまいました。

「少しだけ、しずかにかんがえさせてくれんか！ わしはとしをとった。その上、家来の死にうちのめされて、いろんなことを忘れてしもうた。じゃが、水を飲んだからには、思い出せることもあるにちがいない。わしは、時間がほしい！！ おぬしたち、わしが思い出すまで、待っていてはくれないかの！」

王さまはひくい声でいいました。

なにを思い出すのかな？

ぴっかぴっかの、黄金のごてんだなんて、本当に、あったのかな？
あったとしたら、王さまの、夢のなかさ！
ポワンは思いました。

「あっ！ 光ってる！」

お兄ちゃんのアワンが叫びました。アワンの指さした、水のしずくが光っています。

アワンが、かがみこんで、しずくのたまっている石の上を、ごしごしこすりはじめました。
大きな石が、ぐらぐら動きました。

「くすぐつたいよ！ やめてくれ！」

王さまがヒメイをあげたのです。アワンはかまわずに、こすりつづけています。

ピカリリ！！ そのとき、石が光ったんです。

「見ろ！ この石が、金なんだ！ ポワン、これこそ、かたつむりの王さまのきゆうでん、黄金のごてんだよ！！ これが、かたつむりのカラなんだ！！ やったー！！」

お兄ちゃんのアワンは、こうふんして、飛び上がりました。

「おれたちで、ぴっかぴっかにみがいてあげようよ！！ ほら、みがいたところは、すつごくき

れい！ 王さまのごてんにまちがいないさ！！」

ポワンも、お兄ちゃんにならって、みがきはじめました。そのとき、王さまが顔をあげました。「待て、待ってくれ！ おぬしらは知らんじやろうが、もともと、かたつむりのカラというものは、よごれないものなんじゃ。こまかい、へこみが、すじが、全面にあつてのう、どんなときでも、わしらはきれいなカイガラを背おつて生きて来たもんじゃ。それが、わしら、かたつむりぞくのホコリじゃった！！ わかつて来たぞ、わしのごてんが見えないわけが！！ わしがこうして、ごてんにすんでいるということは、わしのごてんはあるということじゃ。じゃが、見えない！ それには、わけがあつたんじゃ、わしは、思い出したぞ！ だが、まだ、全部思い出したわけじゃない。もう、しばらく、静かにしておいてはくれまいかの！」

「いいですよ、王さま！」

ポワンとアワンは、日でりで枯れてしまった、しばふの上に腰をおろし、王さまが思い出すまで、おとなしく、待つことにしました。

ふたりで、しばふに、寝っころがっていると、カエルのケロップが、ポワンの顔の上を、ぴよん、ぴよーんと、飛び越えていきました。なにかあわてているようです。

「まあいいか？ 親友だもんな！」

ポワンはつぶやきました。ケロップも、池の水が干上がってしまい、外出が、おおくなっています。

「ケロップのやつ、大きな池にひっこす気かな？」

アワンがケロップを目でおいながらいました。ケロップが友達のカエルたちと、頭をつきあわせてケロケロ話している声が大きくなっていくようです。

お姉さんが、スキップしながら、門の方から、やって来ました。何かいいことあったのかな？ アワンとポワンは思いました。

お姉さんは、よせばいいのに、ぼくらの目の前で、バレリーナみたいなおじぎをしようとして、スカートの上そを持ったまま、ずっこけました。

「ああ、いた！ あなたたち、そろって、なにをしているの？ このつけもの石、なんでこんなところにあるのよ？ 危ないじゃない！ それにしても、へんな石ね！ あれれ、いま、ぴかっと光った！ たしかよ！ なんだろ？ 金のこう石かな？ どれどれ、お姉さんに、よく見せて！！！」

しりもちをついたままで、お姉さんは、王さまの体に、さわろうとしています。

「だめだよ！ だめだったら！！ いま、かたつむりの王さまは、考えごとをしてるんだから！！！」

ポワンはお姉さんと、王さまの間に割って入りました。

「なに、とぼけてるの？ わたしたち、大がねもちになれるかもしれないのに！！ そうだ、パを、呼んでこようっと！！」

お姉さんは家のほうへ、ちやうとつきゆうで、走っていきます。

そのとき、ごてんが動きました。

「いまの女は、だれかな？ いやいよ、悪ものが、わしの黄金のごてんに、目をつけたらしい！ 思い出したぞ！！ わしの国の、だいじんが、わしにいい残した言葉を！！ 黄金ごてんは王さまの命を、危ぶなくしますから、ごてんの表面に、メイサイシヨクをほどこしましたと、そう言うたんじゃ。つまり、目だたなくするために、コケを植えつけたと、そう言うたんじゃよ。悪い人間が、つけねらっていますから、気をつけてください。そう言い残して、死んでいった！」

ぴかっ！ぴかっ！ 王さまの目が、ダイヤモンドみたいに光りました。

「もともと、わが国は、このあたりの湿めった土地を治める、大国じゃった。おぬしたちの生まれる、ずっと、ずっと、前の話じゃ。それを、人間どもが、われわれの国をふみ荒し、いらぬ仕事をかさね、すっかりすみにくくしてしまった。その上、カンバツがやってきた！ 国民は、ひあがって、つぎつぎ死んでいったんじゃ。そこで、わしは、もっと南の、すみやすいところに、あたらしい国をつくるようにと、命令したんじゃ。センケン隊を、まず出発させ、つぎに、王子のひきいる、本隊が出かけていった。その後、王子からの知らせはない。王として、けつだんし

なければならぬときが、来ているんじゃない。輝かしい王国の子そんなとして、わしはこのごてんを、王子にひきつがなければ、死んでも、死にきれん！ そのために、わしは出発したい！ しなればならぬのじゃ！！」

王さまは、すがたをかくしたまま、むねんそうな声だけがひびいて来ました。

「でも、王さま！ コケだらけでは、重くて重くて、歩けないよ！ 歩かなければ、王子さまとあうこともできないじゃない！ へんなコケは、落としたほうがいいにきまつているさ！」

ポワンがいました。

「さっきの女は、ぼくたちのお姉さんです。人のものをぬすんだりはしませんよ。安心してください！」

アワンが、王さまの心配がわかったようにいいました。お姉さんはまだ、もどってきません。こんなこと、すっかり忘れて、ケーキでもほうばっているころさ！ ポワンは思いました。

ポワンは、また、ごてんをみがきはじめました。ていねいに、すみからすみまでコケをけずり落としていきました。

アワンが、となりの家から、井戸水をもらって、よいしょ、よいしょと、はこんで来ました。水が、しゃわしゃわと、ごてんの上で飛びはねます。

「ああ、これで、きつと、かたつむりの王さまも、生きかえるよ！」
ポワンとアワンがごてんをのぞきこみました。

「かたつむりの王さま、水飲みましたか？ 元気出ましたか？」

ふたりは声をそろえていいました。

「ああ、よくやったぞ！ 飲めないが、顔はあらった。ようやく、生きた心地がするわ！！ 体が動くようじゃ！」

王さまのまんぞくそうな声が、かえってきました。

「どうじゃ、ごてんはきれいになったかの？ ルビーや、エメラルドがちりばめてあるのがわかったかな？ 王の目にはダイヤモンドが、やりにはサファイアが、角にはオパールが、見えるはずじゃが、わかるかのう？」

アワンが、ポワンのみがいだごてんの上から、バケツをかたむけて、井戸水をながしました。よごれたコケがうずまきながら、ながれ落ちていきます。

日の光が、アジサイの葉っぱのあいだを通って、金色のごてんにちりばめられた、宝石の上で、十字になって輝きました。ルビーの赤、エメラルドのみどりが、金色と、似合っているなあとポワンは思いました。

「王さまは、こんなに、美しいごてんに、すんでいたのか！！」

アワンがため息をつきました。

「これで、だいぶ、軽くはなっただろう？ 王さま、こんどこそ、歩けるかな？」
アワンが体を振ると、夢からさめたようにいいました。

「明日から毎日、水をかけてあげますから、1メートルでも、王子さまのいるところに近づくよ
うに、歩いてください!!」

ポワンはやさしくいきました。

「ありがとう。ようし! 動けるか? 動けないか? 力いっぱい、這って見よう! う、う、
う……」

かたつむりの王さまは、大きなごてんを背おって、じりじり動きました。

「王さまの体力では、ごてんは、まだまだ重い! 水分も、えいようも、たりないんだよ!」

お兄ちゃんのアワンは、ちゅういぶかく王さまを見つめています。

ポワンは庭から家にかっこみしました。

「わが家だって、だん水なのよ。お庭に水をまきたいのなら、水道の水が出るようになってから、
まきなさいよ!」

ママが言っています。

「かたつむりの王さまは、死にそうなんだよ。そんなこと、言っていられないんだから!!」

ポワンはママのいけた、かびんの水を半分わけてもらい、王さまのところに、もどって来まし
た。

「おお、この水は花の匂いにするの。早く、きれいになった、ごてんの上からそそいでおくれ!
そしたら、わしの口もとに、したたりおちて来るはずじゃ。早く早く、命令じゃ! 早くしない

か！　ぐずぐずしていると、家来には、してやらんぞ！！」

王さまは、かんしゃくをおこしたようです。

「王さま、すつごく、きれいなきゆうでんですね！！　こんなの見たの、生まれてはじめて！！」
ふたりは声をそろえて、言いました。

「そうじゃろう、そうじゃろう！　先祖代々、伝わって来たごてんなんじや。わしは王子にこれを渡してからでないと、死ねないんじや。おお、ごてんが、だいぶ軽くはなったの。ありがとう！！　おぬしらのおかげじや。　そこで考えてみたんじやが、わしの体力では、一日三メートルくらいしか歩けまい！　じやから、毎日三メートル南のほうへ、水をまいてはくれまいかの！　そうだな、草の葉っぱもまいておいてくれたら、とても助かる！」

かたつむりの王さまは、言うど、ふたりを、長いやりのさきの大目玉でじつと見つめました。

アワンは勉強があるというので、ポワンは、かたつむりの王さまのために、そうすると、やくそくしました。

ポワンは、朝おきると、すぐ王さまにあいさつをし、水をまいてから学校へ行きました。

「おまえは、あいかわらず、よりよいの悪いやつだな！　王さまが、あんなにのろろしているたんじや、何時になつたら、王子さまにあえるか、わからないじやないか？　こんなに、のろろ歩くなんて、時代おくれなんだよ！！　ぼくだったら、自転車にのせて、つれていってあげる

よ！ なんなら、パパの車に、のせてもらったらいい！」

お兄ちゃんのアワンは言いました。

もつと早く、そうしたらよかったんだ。王さまの体力は落ちていたんだし、むりをつづけたら、命をちぢめるって、わかっていたんだから。ポワンは思いました。

「王さま、ぼくの自転車に乗ってください。つかれないし、速く行けるもん！ 王子さまにだって、早くあえるよ！」

「わしのカラは、ぐるぐるのうずまきじゃから、やっぱり、目も、ぐるぐるまわりやすいんじやよ。乗り物よいをするから、ダメじゃ！」

王さまは青い顔をして首をふりました。

「そんなら、ぼくのリュックサックに入って、ぼくと一しよに歩いて行くというのは、どうですか？」

王さまは浮かない顔をしています。

「目がまわるって？ やりの先の目玉をごてんの中にしまっておけば、だいじょうぶですよ！！」
アワンがでんでんむしの歌をうたいながら、助け舟を出しました。下のほうに角も見えていました。

「ときどき、葉っぱの上や、土の上でやすませてくれると、約束してくれるなら、そうしよう！」
王さまは長いやりをふって、オーケーをだしました。

こうして、かたつむりの王さまと、ポワン、一匹と一人の旅は、はじまったのです。

木の葉は、日でりつづきで、枯れかかっています。空は、どこまでも、どこまでも、まっ青にすみわたっていました。きもちのよい朝です。

ポワンは、王さまをたいくつさせないように、とくいの鼻ぶえを吹きながら、歩いて行きました。

鼻ぶえは、町のなかにも、かたつむりのごてんのなかにもながれていきます。

ポワンのリュックサックのなかで、かたつむりの王さまは、ふたをきっちりとして、目をつむっていました。ポワンの鼻ぶえのリズムにのって、ポワンの足にあわせて、ずいぶんたくさん歩いたような気がしました。

ポワンは、われわれかたつむりの、なん年ぶんを歩いたのかな？ 王さまは思いました。生まれた土地をはなれて、こんなに遠くまで旅したのは、はじめてでした。

王子らはどこまで行ったのか？ はなれていると、なつかしくなっていくばかりです。二年まえに出発したのだから、王子の歩はばと、速さと、時間をかければ、どのくらい、離れているのか、わかるはずじゃが……。若ものことじゃ、キャベツの葉っぱにでも、とりついて、車や、

飛行機にのりこんだら、どんなに遠くへ行ってしまうたか、わかりはしない。

王さまは心ぼそくなって、体がたよりなく、軽くなっていくような気がしました。

ポワンの吹く、鼻ぶえは、陽気に、はずみながら町の上をながれていきます。町のひとびとが、さそわれるように、外に、出てきました。

王さまも、ふわふわ、ゆらゆら、曲にのって、もう、体ごと、流れ出していくようです。

やっばり、乗り物よいか？ 王さまは、酔いでもさますように、思わずごてんから、二本の長いやりを出してしまいました。目玉はその上です。

ああ、青い空や、高い家や、コンクリートの道路が、かたむいて、ああ、ぐるぐるとまわりはじめました！ もう、とめどなく、まわりつづけるばかりです。目がまわる、あ、あ、ああ、ああああああ、あ、あ、ああああああ！！

「こわい！ こわい！ こわい！ こわい！ わしをおろしておくれ！！」

王さまがヒメイを上げました。

ポワンはびっくりして、リュックサックをおろし、王さまを、外に出してあげました。

おお、その時、王さまのごてんが、日の光をはんしやさせ、赤や、黄や、青の、数えきれないくらい、たくさん十字になって輝きました。

「ああ、しまった！！」

誰かに見られたかな？ ごてんが光ることを、すっかり忘れていたポワンは、首をすくめると

心配そうに、まわりに目を走らせました。

王さまは、そんなこと、眼中にないように、カラのなかに逃げ込んで、目玉も、角も出そうともしません。

「王さま、どうしたんです？ 外に出たかったんじゃないの？」

ポワンが心配そうに、のぞきこみました。

「目がまわって、どっちが窓だかわからなくなってしもうた。あっち、こっち、やりをぶつつけて、やりがおれそうじゃ！」

「こっちですよ！」

ポワンは、かたつむりのふたを、とんとん、とたたいてあいずしました。

「いやはや、たいへんな目にあうたわい！」

かたつむりの王さまは、ようやく、目玉を出しました。

ポワンは水とうの水をそっと、かけてあげました。

「ぼくら、どこまで、進んだかな？」

ポワンは、ゆっくり息を吐きながら、体をぐるっと回転させました。ここは、町の中心街で、目の前には、お姉さんが、かよっている料理教室のかんばんが見えていました。

「世界一のエスカルゴ料理を、あなたに！！」

「あっ！！」

ポワンは口をふさぐと、あわてて、ごてんごと王さまを抱え上げ、リュックサックの中にもどしました。

「どうしたんじゃ、どうしたんじゃ！」

王さまの声が小さくなっています。

だって、エスカルゴって、かたつむりのことだって、お姉さんがいったもの。王さまの目に、こんなひどいかんばんを見せるわけには、いかないんだもん。

早く、遠くに行かなくっちゃ……。ポワンは思いました。

「ペーペーペーペーペー」

頭の上を、へんな音が続いています。

「シエラ、ジュ、ポツポ、シュツ、ピツピ、ソルソル、シュポ、キアル、パンパン、ペツポ、ペポ、ポポ、テア、ボンボン……」

おかしな声と音が重なっていました。

ポワンが、リュックサックをかついで走り出すと、白いコック帽が、ポワンを見るまに取り囲みました。手に手に何かをもっています。

フライパンや、でっかいスプーンやフォークや。ナイフや、はさみを持っているものもあります。

「ボンジュール！」

金ばつの男が笑いながら、ポワンの肩をたたきました。

「こちらは、世界一の、かたつむりの料理人です！！」

　　つうやくらしい男がいました。

「見ていましたよ。世界一のかたつむりの王さまを！！　あなたは、リュックサックの中にかくしましたね！！」

「そんなもの、しりません！　どいてください！！」

　　ポワンは小さな声でいいました。

　　世界一の男が、リュックサックを指さしています。

「どうか、そのかたつむりの王さまを、ただでとは言いません。ゆずってください！！」

「そんな、王さまを売るなんて。なんてことを言うんだよ！！」

　　ポワンは歯をくいしばりました。

「わたしに、世界一のエスカルゴ料理を、つくらせてください！！」

　　世界一の料理人はいいました。

　　コックたちがポワンをとりまいて、手に手に持っているものを、叩きながら、のしかかるようにせまってきました。

「たまげたなあ、みんな、めっちゃ、背が高い！！」

　　ポワンは落とした鉛筆を拾うとみせて、かれらの肢の間をくぐりぬけました。

　　リュックサックにシェフの手がかかったみたいですか？　リュックサックごと、王さまをうばわ

れては、おしまいです。

ポワンは、全身でいやいやをしました。必死でいやいやをしました。

まわりがさわがしくなつて、シエフの手がはずれました。

「シエフー！！ そのかたつむりは、死んでいますよー！ そのかたつむりは、くさつています！！」

教室の窓から、ポワンのお姉さんがもう、落っこちてしまひそうなほど、乗り出して叫んでいるのが見えました。何時もの、のんきな笑い声がひびいてきます。

「ハ、ハ、ハハハハ、ノン、ノン、ノン、ノンですよー！！ 見たんです！ やりはおれて、目玉なんかつぶれていました！！」

みんなが、教室を見上げて、それぞれに何か叫んでいました。

いまだ！！

ポワンはもう、迷いません。

つぎつぎに、追ってくるコックを突き飛ばしました。

逃げる手がなくなつたら、かみつきました。

敵がびっくりしたところで、逃げ出しました。

お姉さんが助けてくれたんです。

逃げました、逃げて、逃げて、逃げて、逃げまくりました。

かけっこ自慢のポワンの足も、もう、ヒメイを上げていました。

もうへとへとです。靴が舌をだしていました。

公園のベンチにすわって、ほっとして、空を見上げました。

「世界一のエスカルゴをどうぞ!!」

今度は、ひこうせんのおなかで、大きな大きな広告がゆれていました。

料理ではなく、王さまを丸ごと、どうぞと言ってるんです。いつから人間はこんなに、こわいことを、平気で、せんでんするようになったのでしょうか？

ポワンは泣きながら、小さくなって歩きました。

シュツ、シュツ、シュツ、シュツ、ゆく手におなじ間をおいて、青い煙が立ち昇っています。

「こら、チビ! 王さまのかたつむりを渡すんだ!!」

金色のごてんに気のついたギャング団が、ヘリコプターで、こうげきをはじめたようです。

タツ、タツ、タツ、タ、タタタタタ、タ、銃弾がうちこまれていました。

「こら、チビ! 王さまの、ごてんを渡すんだ!!」

大きな音で、マイクが叫びました。

チビ、チビ、チビと何度いったのでしょうか。ポワンも、もう、がまんできません。

「チビじゃないもん!! ぼく、大きいほうから、3番目!!」

ポワンは 叫びました。

「九九だつて、そらで、まちがわずに言えるんだから。うそじゃないぞ！！ 22が4、23が6、24が8、99、81！！」

ポワンの鼻のあなが大きくなりました。

「サンデー、マンデー、チュウズデー、えいごだつて知ってんだぞ！！」

ポワンは大声で叫びました。

「エーと、エーと、ぼく、あと何知つてたんだっけ？」

ポワンがつぶやきました。

「おまえら、聞いたか！！ これが、オレラの相手かよー！！ アハハ、アハハハ、へへへへ、こら、チビ！！ いま、一ひねりにしてやっからなあ！！ 待っているんだ！！ アホホホ、アホホホ、アヒヤヒヤヒヤ、ヒヤヒヤハハ、ハハハハ、ウエハハハ、ハハハハ、ギャハハハ……」

ギヤングが笑っています。

笑いこぼして、涙なんか出しまくって、もう、下降したヘリコプターのなかで、ハンドルなんか、にぎっていません！

笑いすぎて、つぎつぎに、ヘリコプターは、ついらくしていきました。

おかしな、チビが見たくて、町の人たちが走って来ます。

「ああ、大変だあ！！」

まだ、あきらめきれない、料理人たちがそのあとから、追いかけて来ます。行く手に、ヘリコプターから落っこちた、黒いふくのギャングがスルメみたいのにびていました。

ポワンの行く道は、どこまでも、どこまでも、つづいていました。

もうだめ！！ 足が、動かない！！ 動けない！！

「お兄ちゃん！！ たすけてよー！！」

ポワンは叫びました。

あっ！ 一歩、二歩、三歩、空中で足をふみました。

「ドッスン！！」

砂がながれている音が、ザーザーザーと、どこか、遠くで、続いています。

ポワンはつかれきって、そのまま朝まで眠りました。

目がさめると、道路に大きな地われが来ていました。

村に入ったところで、とんとんと、王さまがリュックサックのなかから、ノックしてきました。

外にでも、王さまは昨日のさわぎについて、ポワンに、何も聞きませんでした。

「ありがとう！ ああ、なつかしい、池の匂いじやの。干上がっていても、匂いは消えないものらしい。：：おや、カエルくんの声が聞こえるぞ！ ひさしぶりだなあ：：。さてよ、カエルくんがいるとしたら、王子たちもいるかもしれない！！」

王さまは、生きかえったように元気に、二本のやりを振って、せんすいかんみたいに、まわりをながめまわしています。

王さまの頭が、ぼこぼこにはれあがり、つのが折れて、たれさがっているのが見えます。王さまも、ぼくといっしょで、大変だったんだな！ ポワンは思いました。

ポワンは親友のケロップくんを呼んでみました。

引越しするなら、この池だろうと、アワンが話していたのを、思い出したからです。こんな日にはポワンも、なつかしい友だちに、あいたくなっていたのかもしれない。

「おーい、カエルくん！ おーい、カエルくん！ おーい、カエルくん！！ ぼくの親友の、ケロップくんは、いませんかあー！！」

大きな声で呼びました。大きな声で叫びました。

「ケロツ、ケロツ、ケロツ。ケロ、ロツプ！！」

ケロップくんが、ぴよん、ぴよーん、いつもの調子で、こつちにやって来ます。ひき連れてくるのは、ぼくの家の庭で、見たことのあるカエルくんたちです。

「なあんだ、みんなもいっしょだったの？」

ポワンがかけよろうとしたとき、

「ああ、カエルくん。わしの国の、かたつむりの本隊を、見なかったかのう？」

待ちきれない王さまが、呼びかけました。

「ケロップ、センパツ隊見たよ。もつとしめって、すみよいところをさがして、南へむかいました！」

王さまが、がっかりしているのがわかります。

「で、本隊には、あわなかつたかのう？ 隊長は、わしの王子じゃが？ さいきん、かたつむりたちに出あったことは、なかつたかな？」

王さまは、まだ希望をすてていません。

「ケロケロ、ケロップ、ある、ある、あります。あるけど、ヒミツ！ 悪い人がねらってるから、ゆだんできない！」

ケロップは、言ってから、しまったと、口をおさえています。

「どんなヒミツがあるのか、話してくれまいか？ 話してくれたら、家来にしてやる！！」

王さまが言いました。

「ケロップはおしやべりだな。もう、言っちゃだめ！ 言えば、後悔するにきまつてるもん！」
ポワンが友だちとして、いいました。

王さまがへんな顔をしてポワンを見ました。

ケロップと王さまは、おなじ庭にすんでいたのに、友だちではなかったようです。

「困ってるのは、かたつむりくんだけじゃない。ぼくら、カエルも、死にそうなんです。池も、沼も干上がって、もうすぐ、水一てきなくなるでしょう。みんなやせ細って、もう、ふらふら。遠くに、飛んで行きそうなんですよ。でも、ケロップ、友だちを売ったりはしない！ これから、みんなで、雨ごいをするんです！」

「ポワン、雨ごい、かみさま聞いてくれるかなあ？ かみさま、いるよなあ？」

ケロップは、さいごのことばをポワンに残して、振り返りながら、遠うくなって行きました。

「ポワンは、カエルくんに口止めたのか？ いや、かたつむりを見たとき、あのカエルは確かに言った。わしの王子は生きているにちがいない！ 王子のカラにも、少しだが宝石はちりばめられておるんじゃない。ねらう、ワルはかならずいるはずじゃ！」

王さまはポワンに胸の中をうちあけるように、つぶやきました。

待っていると、カエルの歌声が、風につれて、聞こえてきました。

カエルの雨ごいの歌です！！ からだの中から、しぼり出した歌声は聞いているものの胸に、はだかで、飛び込んでくるようだ。ポワンは思いました。

それは、驚いたことに、でんでんむしの曲でした。

でんでんむしのリズムにのって、王さまの角や、やりが、目玉が、空にむかって突き出されて
いました。

カエルくんたちの歌声は、つぎつぎに、雲一つない高い高い空にむかって、ケロケロケロと手
をつないで、昇っていくようでした。

村人たちも町の人々も、口をあけて、天を見上げています。もう数年、カンバツがつづいて、
お米も野菜もゼンメツなんです。

みんなが、どんなにお願いしても、カエルたちが、どんなに歌っても、雲の一つも、わき出し
ては来ませんでした。

カエルが雨をよんでも、かたつむりが雨をよんでも、雨はふっては来ませんでした。
雨もふらないのに、その熱気で、池の水が干上がっていきます。

熱くなった、さいごの水のなかで、おたまじゃくしたちが、うじゃうじゃと、体をくねらせて
いました。だんだん、動かなくなっていくます。

カエルにもそれを助ける手はないのか、遠くから見守っているばかりでした。
やがて、みんなひからびて、風に吹き飛ばされていくのでしょうか。

ポワンは、なにを思ったのか、池に手をつっこみ、両手でおたまじゃくしを、すくうと、上着
のポケットに突っこみました。

五十匹はいるさ！ ポワンは思いました。

世界中がゆれていました。

「あのカエルの雨ごいの歌は、雨は降らなかったのに、地震を呼んでしまったらしい！」

村の人たちは、うらめしそうに、肩をよせあいました。もう、何日もなにも食べていません。

「震源地はどこなんじゃ？」

かたつむりの王さまがのび上がりました。

「それが、よくわからんのですよ。あっち、こっち、めっちゃ、動くんですから……」

町の人たちが言っています。

「と言うことは、わしのケイケンからすると、地の底に、大きな地割れができたせいに違いない！」

地割れが走っているんじゃ。地上へ、地中へ、地の底へ！ 地の底から、地中へ、地上へ！」

ポワンには、王さまが急に、先生みたいに見えるのが不思議でした。

地割れは前からおきていたのかもしれない。ポワンの落ちた道路にも、地割れがはいっていて、どこかで砂の流れる音がしていました。

そこでも、ここでも、地割れができ、次々に家がかたむいていきました。

道路も地割れで通ることが出来ません。

ポワンは、駅に入っていました。線路を伝ったら、先に行くことが出来るかもしれないと思っただけです。

駅は、無人駅みたいに誰もいませんでした。

パパみたいに、ポワンも腕を後ろにくんで、時刻表を見上げました。パパはどうしているのかなあ。ポワンは目をこすりました。時間が数字が、何重にも見えていました。

駅舎がガクガク、音をたててゆれはじめました。足もとに、くもの巣みたいな地割れが広がっていきます。

おたまじゃくしがいつせいに、ポワンのポケットから、ピオン、ピオンと飛び上がりましたので、ポワンも一しよにピオンと飛び上がりました。

リュックサックもピオンと飛び上がりましたから、かたつむりの王さまも、ごてんと一しよにピオンと飛び上がって、外に一緒に飛び出しましたので、駅がつぶれても、だれも、けが一つしませんでした。

いつのまにか、おたまじゃくしには、足がはえていたんです。

村はあつちでもこつちでも、地割れがして、地割れのなかから、なぜか、白いおいもが顔を出しました。

「このいもたちには、親がいるはずじゃ、震源はそこにちがいない。親をさがせ！！それが、カンバツも呼び寄せているんじや、親を探せ！！」

かたつむりの王さまは、長い二本のやりをふり立てて言いました。

聞き耳をたてていた村人たちが、おいもの親を探して、村中を走り回っています。町の人々がおいもの親を探して、町中にらみをきかせ、車やバイクで探し回っていました。

走り回った人々は、約束したように、町と村のさかいにある、天を突くような大木の下で、休みました。

天をかくすほどの、みどりの葉の上を、風が渡っていきます。

大木は、カンバツにも負けないで、枝を広げ、青々とした葉を茂らせ、さやさやと風にゆれ、小鳥を止まらせ、虫を育てて、この地震のなか、しっかりと足をふんばって、立っていました。

「見ろ!!!」

王さまがやりの先の目玉で、木の足もとをさしています。

そこには、大きな大きな、じゃがいもが、顔を出していました。

「これが、親芋だ!!! この木から出たつるに、お化けのような芋が鈴なりになって、地中で育つて、水分を独り占めにして、地割れを広げていったんじゃ!!!」

そのとき、時間を知らせる、オルゴールの音が流れてきました。

ポワンが見上げると時計塔の時計は午後三時を指していました。

「おお、じゃがいもの葉っぱじゃ!!!」

王さまはじゃがいもの大木を、何時までも、何時までも、見上げていました。

信じられないと、声をひそめていた村人たちが、地面を掘りはじめました。

「うんこらしよ、どっこいしよ、うんこらしよ、どっこいしよ！」

町の人々もまじって、みんなで、つるを引っ張りました。

「うんこらしよ、どっこいしよ、うんこらしよ、どっこいしよ！」

引っ張ると、大きな大きなじゃがいもがころころ、ころころ、でてきました。

「ああ、すごいなあ、うれしいなあ！ これで、みんなのお腹もいっぱいになる！！」

「おお、すごいなあ、楽しいなあ！！」

見る間に、ジャガイモのお化けで、地上はいっぱいになりました。

地割れにそって、大きさままのじゃがいもが、つるになつてつながっていました。

あんまり、おいもが太るので、そこから地割れが走って、いろんなところで、地震がおきていたんだと、ポワンは思いました。

みんな、おなががぺこぺこです。ポワンのおなかも鳴っていました。

「お料理をつくって、たべさせよう！」

誰かも、誰かも、誰かもしました。

皮をむく人、それ切るひと、お鍋で煮る人、お皿に盛る人、それ運ぶひと、それ食べるひと、食べるひと！！

もう、村中のひとびとが、町中のひとたちが、匂いにさそわれて集まってきました。

いい匂いは、ふんわり、ふんわり、風に乗ってながれていきます。

村も、町も、大祭りです。おおじやがいもの木の下で、踊りが、何時までも、何時までもつづいていました。

ポワンは王さまが酔わないように、そっと、踊りの輪から抜け出しました。

「このままでは、おたまじゃくしは死んでしまう！ なんとかしなければならんの！」
かたつむりの王さまが、言いました。

「ポケットに水を入れてはあげるんだけど、水のもるのは、止められません……」
ポワンがポケットをのぞきこみながら、いいました。

「わしの決心がつけば、いいんじやが！」

王さまがつぶやいているのが、聞こえました。

何を決心するんだらう？ ポワンは思いました。

「わが国には、昔から事件がたえんかった。いや、わしのことじゃない。わしは大じょうぶじや！ わしの代になってからといっても、ずっとずっと昔のことじや。わしらの着ているカラが、大へんな値打ちもんで、そのために、かたつむりは命をねらわれる！ そういうウワサがたったんじ

や。誰だって、命がおしいし。死ぬのはこわい！ 殺されるのは、なおさらのことじゃ。それをこわがって、仲間のかたつむりたちは、どんどん、カラを、ぬぎかえて、急いで、急いで、大人になって。それでも、まだ、ぬぎたがって、ナメクジになるものが、続出したんじゃ！！」

「この間みたいに、ギャングか、料理人にでも、ねらわれたの？」

ポワンが、びっくりして言いました。

「そうじゃよ。みんな、戦うことをしない、やさしい国民せいに、つけこんで来たんじゃな！」

「つけこむって、どういうこと？」

ポワンが首をかしげました。

「ぼかにして、そこを攻めていくことじゃ。やさしければ、自分から攻めてこないとわかってい
るじゃろう、安心していじめることができる」

「そんなこと、ぼく、ゆるさない！」

ポワンは腕をふりまわしました。

「ポワンは元気がいいのう！ われわれ、かたつむりにも、そんな元気がほしかったんじゃ。裸になった、かたつむりたちは、カラをすてて、はじめて、安心して眠るところも、かくれるところものうなってしもうたことに気がついたんじゃ。敵から自分を護る手立ても、立ち向かう勇氣も持ってはおらんかったから、ただ、もう、こわうなって、死んでいってしもうたわ。わしのごてんの下には、かれらが葬られている。かたつむりは墓はつくらない。かれらが、最後に夢見た

黄金ごてんの下で、優しく保護されてきたんじゃ。いや、そう思うて、王は自分をなぐさめてきた！」

王さまが、ふーと息をすいこむ音が聞こえました。やりのうえのこぼれそうな目玉が大きく見開かれていました。悲しい話だなあ、ぼくだって、こわい！ そう思ったとき、王さまが、元氣よく話しはじめました。

「決心がついたよ！！ わしも、わしらの仲間にならって、この大きな、御殿をぬぐことにする！！ ポワンには、このごてんをさかさにして、水を入れ、おたまじゃくしたちを、その中で育ててほしいんじゃ！」

ポワンはおどろいて王さまを見ました。

「ポワンくん、わしは、きみに、こうして背おわれて、ここまでつれてきてもらうた！ それは、感謝している！ そして王子が、カエルくんに助けられて、ぶじでいるらしいこともわかった。そこで、命のあるうちに、わしの出来ることを考えてみたんじゃ、そして、わかった。どうしたらいいか、わかったんじゃ！！」

「黄金のごてんで、おたまじゃくしを助けて、カエルくんに恩返しのもりなの？」

ポワンの声が高くなりました。

「いや、まったく違うよ！ こうやって、連れてもらって動いても、わしの体は弱ってしまいうだけじゃ。そこで、岩のようにかたい決心で、わしの王子のために、最後のごてんを捨てていくこ

とに、かくごをきめたんじゃよ！ 裸で、自力で生きたい！ 自力で生きさせたい！ そう思ってたんじゃ！ そのためには、かざりものは、いらないんだ。黄金のごてんなんぞ、不幸のはじまりじゃ！ ポワンにまで、大変なキケンを与えてしまうたの！ 王子にはもつと、身軽に、平和に生きてほしいんじゃ！！ ごてんを捨てても、生きていく元気があれば、頭があれば、仲間がいれば、生きていける。ポワンやアワンのようにのう！！」

王さまはそのままじっと、目をつむっていました。

「そう、でも、もつたいないなあ。こんなにきれいなものを、本気ですてるんですか？ さっきのさっきまで、このごてんを王子に引きつぐまでは、死んでも、死にきれないと言っていたのに？」

ごてんをすて、なめくじになる！ ポワンには、いくら考えても、よくわかりませんでした。そのかたつむりたちだって、家をカラを捨てたために、無力になって、多分、泣きながら死んでいたのに……。

「お兄ちゃん！！！」

ポワンは叫びました。

「なにを、うろたえているんじゃ！ 早く、おたまじゃくしを、ごてんのなかにうつすんだ！」
ごてんをぬぎすて、裸になった王さまが、えらそうに言いました。

ポワンは泣きながら、ごてんをさかさにして、最後の水筒の水を入れ、その上で、ポケットを

裏返えしました。

ぼと、ぼと、ぼとぼと、ぼとぼとぼとぼと、ぼと、ぴっちゃーん!!!

おたまじゃくしが、うれしそうに、ごてんの中を、およぎまわっています。

王さまは裸の、なめくじみたいな体で、それをじっと見つめていました。

——自分の力で生きる!——

王さまは岩のような決心をしたんです。

でも、たいへんだなあ、もったいないなあ、ポワンは、また、思いました。

ケロツポ、ポップ、ケロツポ、ポップ、ごてんのなかの五十匹のおたまじゃくしは、五十匹の立派な、カエルになりました。

カエルたちは、そろいもそろって、よくふくれる、白い、はりのある、いいのどをもっていました。

本番にむけて、雨ごいのうたの本格的な練習がはじまったのです。

「ケロツポ、ポップの、ポの声を、ぽったり、ぼとり、ぽったり、ぼとり、丸みのある音にするように! 口をまずは閉じ、急に丸一るく大きく開けて、吐く! ぽっ! ぽっ、ぽっ、ぽっ」

「ようーし、そうだ、そのちようし!!!」

ケロップが先生になって、いよいよ、本番の、雨ごいはじまりました。

カエルたちの雨ごいの歌は、村をこえ、町をこえ、山をこえて、みんなの願いを乗せて、どこまでも、広がっていきました。

カエルたちの雨ごいの歌は、雨を迎える嬉しさに飛びはねながら、空高く、昇っていきました。

「おや、空に雲さんたちが、集って来たぞ!!!」

町のひとびとも、村人も、カエルも、かたつむりも、けものたちも、鳥も、虫も、草も木も、花も、みんな、待ちにまつた雨です。

はだかの王さまも二本のやりをのばしています。

はじめの、ポツチンが、ポワンのおでこで、はねました。

つぎの雨が、ポツチン、つぎのつぎの雨が、ポツチン、ポツ、ポツ、ポツポツポツポツ、ポツポツポツポツ、ポーツ、ポポツツ………。

もう、雨は、降りやみません。

「楽しいなあ。ああ、すごいなあ!!!」

もう、だれにも雨を止めることなど出来ません。

「うれしいなあ!!! 生きているなあ!!!」

村人たちが、町のひとびとが、雨でぬれるのもかまわず、おどりだしました。

ポワンは大いそぎで、王さまをそっと、かかえあげました。あんまり軽くて、ポワンの涙が雨になりました。ほんとにそれでいいのかなあ？

カエルくんたち、あんまり歌がうますぎたから、こんなにたくさん雨がふって来たんだよ。ポワンは思いました。

これでは、カエルくんは元気でも、かたつむりが水に流されてしまいます。

「大変だー！！」

いちはやくキケンを感じ取った王さまが、ポワンのポケットの中から叫んでいます。

「おーい、カエルくん！ おーい、カエルくん！」

ポワンも大きな声で呼びました。

カエルが一匹、のんびりした、カエルおよぎでやってきました。

「ああ、カエルさん、助けてください！ かたつむりさんたちを助けてあげてください！」

ポワンは声をからして、たのみました。カエルは聞こえたのか、聞こえなかったのか？ 空を見上げて知らん顔です。雨がすこし、小降りになったようです。

カエルは、ポワンの目の前で、とくいそうにカエルおよぎをしてみせました。

ひ上がっていた池に、水が、音をたてて、流れこんできます。

池の水面がぐんぐん上がっていききました。

「カエルさん、助けてくださいー！！ どうか、かたつむりさんを助けるために、お友だちのカ

エルさんを集めてください！！ この村に、かたつむりさんがいることは、わかっているんです。話してくれたのは誰だつて？ それは、ケロップくんだよ！」

かたつむりたちの命が、かかっているんだもん、ヒミツなんていってはいられないよ。

「ああ！ ケロップなら、すぐやってくるさ！」

カエルが振り返っていいました。

そのとき、カエルたちが、白い波を押し、泳いでくるのが見えました。

ケロップと50匹のカエルのようです。ケロップにくらべて、大分小型なのがわかりました。

よく見ると、カエルくんたちは、背中に一ぴきずつ、かたつむりを乗せていました。

助かったのです！！

カエルたちは黄金の御殿から出て、今、元気いっぱい、カエル泳ぎで、背の上のかたつむりを無事にとどけるために、泳いできます。

美しい眺めでした。ケロップを真ん中にして、両側に子ガエルを従え、三角形に白い波を押して、やってきました。しかも、背中には、かたつむりたちの丸い家が、日の光をうけて、輝いていました。王さまの子孫に違いないな、ポワンは思いました。

ポワンは、王さまのいる上着のポケットを、上からそっと押さえました。

「ポワン！！」

なつかしい、お兄ちゃん、アワンの声です。見ると、池のそばにアワンが立っていました。

学校はどうしたのかな？ たすけてーといったぼくの声が聞こえたのかな？ ポワンは思いま
した。

「これに、のっていけば、岸にたどりつけるぞ！！」

アワンの流した板切れにとりついていて、小さなかたつむりが見えました。

「ケロ、ケロ、ケロツケ、王さま…… あとの十一匹は、じゃがいも畑の、しげみの中でーす！！
ぶじていますよ！！」

進んでくるケロップが、王さまにむかって手をあげました。この洪水では、もう、ヒミツはな
しなのでしよう。

「ケロツケ、王子は、あとに残ることを、えらびました！！」

ケロップが、王さまに向かって頭をさげるのが見えます。

「ありがとうー！！」

親友はもつものさ！ ポワンも手を千切れそうなほど振りしました。

お兄ちゃんのアワンは、よそ行きの服をきて、ネクタイまでしめているんです。
「どうしたの？」

ポワンがおどろいてアワンを見直しました。

「逃げて来たんだ、家出をして来たんだよ！」

ポワンは笑いました。

「ぼくならわかるけど、お兄ちゃんがなんで、そうなるの？」

「ぼくは、一人で三十の遺体を、火そうにしたんだよ。こんな悲しみは、この十一歳でおわりにしたい！！」

「なんの話？ おどすのはやめてよ。それでなくたって、ぼく、大変なんだもん！」

ポワンは心ばいです。

「ごめん、ごめん！！ こっちにも、いろいろあったんだよ。三十のい体は、かたつむりの死体のとき。おまえが出て行ったあとで、石の、いや、ごてんの下から、たくさんの裸で死んでい、かたつむりが発見されたんだ。なぜ、そこにいたのか？ なぜ、ごてんの下じきになったのか、わからない！！」

アワンは首をふっています。

「それで？ お兄ちゃんが、何で、家出をしなければならんだか、ぼく、わかんない？」

ポワンはいいました。

「そうだろうな！ ポワンは、トケイ王を知っているか？」

「いや、トケイでもはつめいしたの？」

「ちがう、かたつむりの王さまだ！ パパが話してくれたんだよ。かたつむりのそうぎのあとでな。この服は、そうぎに出席したしるしだ。ぼく、そのまま、来てしまったから……」

「なんで？ パパがそんなこと知ってるの？ かたつむりでもないのに？ そうぎだなんて、どうして、そんなことになるのかなあ？」

ポワンはふしぎそうに首をかしげました。

「だろう！ それがな、パパは言うんだ。ぼくの血のなかには、ぼくたちの血のなかには、かたつむりの血がながれているんだって！」

アワンの顔が困っているように見えます。

「フーン、それって、なんかの、お話？」

ポワンが言いました。

「いや、パパは、まじめだ！」

アワンはポワンをじろじろ見つめなおしていいました。

「にてるかな？」

アワンがつぶやいています。

「だって、かたつむりには、もともと、赤い血ってあるのかな？ 白い血ならあるのかな？」

ポワンはポケットのなかの王さまを、気にして、小さな声でいいました。

「で、トケイ王って、何をしたの？」

「三時に、困っているものを、助けたんだって！ 午後三時！ パパも水害で流されたところを、王さまのごてんの舟で助けられたんだそうだよ。今、あるのは、トケイ王のおかげだって？ ごてんの下敷きになっていたのは、パパの兄弟姉妹だと、パパはいうんだ」

「それって、知ってるよ！ なめくじになって、死んだかたつむりたちがいるんだって……」
ポワンはアワンの耳に口をよせていいました。

「僕がおかしいっていったら、パパは怒ったんだよ！ 気の弱い、優しい兄弟姉妹を誇りにおもっているんだって！！ パパはそういつてゆずらないんだ。あんなに怒った。パパ見たことがない。それで、ふらふら歩いていたら、ここにきていた！」

アワンは困り果てたというように、お手上げのポーズをとると、前を歩き出しました。

「三時って、おやつの間ね、その王さまとお友達になりたいな！」

ポワンは笑うと、じやがいも畑をめざして歩きだしました。

「なぜ三時か？ それは、午後三時で王様の時計はとまっているんだって、そう、言うんだから？ それは、パパの言う兄弟姉妹のなくなった時間で、トケイ王の時間は、そこで止まってしまつたと、パパは言うんだ！」

ポワンは歩いていました。王さまを王子に引き渡すためです。

「そんなこと、いったら、どの時間も、みんな、三時になるじゃない！！」
ポワンは口をとがらしていいました。

この王さまにも名前があるのかなあ？ ポワンは思いました。

リュックサックのなかでは、王さまのぬいだ、黄金ごてんが、カエルたちを送り出して、静かに休んでいます。

「ね、教えてよ！！ ごてんはどうしたらいいのかな？」

ポワンはアワンを追いかけながら言いました。とたん、空気が、かたまつたような気がしました。

「ギャングだ！！ にげる！！」

アワンが叫んでいます。

裸の王さまがポケットのなかで、飛び上がりました。

黒い服をきた男たちが列をつくって、膝もまげない、棒みたいな歩き方で、近づいてきます。

「全体とまれ！！」

列の中から、隊長らしい、これも、黒づくめの男が出て来ました。

「かたつむり王国の代表に、あいたい！！」

その男はアロンにむかって言いました。アロンがポワンにぱちぱち、目くばせしました。

「ぼくが、代表の代理のものです。何か？」

アロンは、落ち着いた声でいいました。

「代理ではダメだ！ かたつむりの王さまを出さない！ みんな、調べてある、かたつむりの

王さまを出すんだ!!!」

「何のために？」

アロンが聞きました。

「あの、チビに、王さまの値打ちはわかるまい!! 宝のもちぐされっというんだよ!!」
ギヤングの隊長がポワンのほうに、あごをしゃくっていいました。

「おぼえてろ!!!」

ポワンは手をにぎりしめました。

「きみたちは、われわれと戦っても、勝ち目はないんだ。こちらには軍隊がある。きみらは、ナイフひとつ、持っていない!!! しかも、小学生だ!!!」

「それが、どうした!!!」

アロンが前にでました。

「戦ったら負ける!!! 負けだ!!! 大負け!!! ベチャ負け!!! メツチャ負け!!!」

「それが、どうした!!!」

アロンが前にでました。

「死んだら、終わりだ!!! わかったら、すなおに、王さまを出せ!!! それとも…、戦車にひかれて、ペツチャンコ!!!」

「なんだと!!! 出せない!!! 決して出さない!!!」

アワンがガンコに、前にでました。お兄ちゃん大丈夫かな？　もう、ギャングの男とはち合わせしそうです。

「ペッチャンコになろうと、なるまいと、こっちの勝手だ！！　欲ばりの、お前らとは、違うんだよ。わかったら、引っ込んでろ！！」

アワンはまるで、映画のヒーローみたいに、まくしたてました。

やりすぎなんじゃ、ポワンが、そう思ったとき、ギャングが突然、後退をはじめました。後退した部隊のあとから、小さな男の子が走り出してきました。

「ぼくに、ぴっかぴっかの、かたつむりの王さま、ちようだい！！」

その子は、ポワンに向かって、ちいさな手をさし出しました。

見ていたんだ！　ポワンは冷たい汗をぬぐいました。

のっし、のっしと、ふくれた白い男が家来に護られて進んできます。

「ぼくは、CCCタイガー団長だ。この子は町で、その王さまとやらを見たと言うんだ。王さまのごてんと、こうかんに、どんなことでも、かなえてやる！！　どうだ、考えてはくれんか？」

団長だという男は、子供をだき上げると、アワンに向かっていいました。

アワンが振向きました。

ポケットのなかから、王さまが目玉だけをだして、合図しています。

ポワンはそろそろと、団長に近づいていきました。

「わしが、かたつむりの王じゃが、わしの黄金ごてんが、そんなに欲しいのか？」
王さまはポワンのポケットのなかから、目玉だけをのぞかせていいました。

「そうです。この子がどうしても欲しいと泣くので、ゆずってはくださらんか？」

団長は、不思議そうに周囲を見回しながらいいました。王さまのいるところが、わからないようです。

「わしは、ごてんを脱ぐことに、したところじゃ、裸でやりなおすことにした！」

「アハハ、ハ、それは、それは、好都合ですな、ゆずって下さい！ ゆずって下さいませね！
ほら、よかったな、よかったな、ごてんは、おまえのものだぞ！！ われらCCCタイガーのものになったわ。バンザーイ！！」

団長は子供と手をつなぎ、小おどりしています。

「子ずれに、作戦を、変えたって、わけだな？ まあいい、じやろう。そこでじゃ、条件が、ある！！ それは、町と、村のさかいめに、じゃがいもの大木が、ある、のを、知っ、ておるか？
あの木を、引き抜い、て、ほしい、のじゃ！！ できるか？」

王さまの声は、不思議なりズムをきざんで、かすれています。

「ああ、そんな簡単なこと！！ 出来ますとも、出来ますとも。それでは、この約束は成立したことに、させていただけます！！」

団長は、紙を出して、親指に、赤い色をつけて押し付けました。アワンは王さまの頭印を押し

ました。

「引き抜くことができた、その、とき、には、黄金ごてん、は、わしの王子から、団長に引き渡す、こととする。代理は、みとめない。それで、いいかな？ 黄金ごてんは、おもちゃでは、ないんじゃ、からの！」

アワンもポワンもきびきび動き、CCCタイガーとたたつむり王国との調印式が終わりました。せっかくの雨ごいで降った雨も、地割れから、どンドン、失われていき、またも、カンバツが、やってこようとしていたのです。

犯人はおおじやがいもの大木だとわかっていました。取り除いても取り除いても、じゃがいものつるは、何処までも、何処までもつづいていくようです。元を、絶ち切らなければならぬことを、急がなければならぬことを、ポワンもアワンも感じていました。

ギヤング団は、おおじやがいもの木を引き抜くことができなくて、失敗に失敗を重ね、とうとう、おおじやがいもの木につなを結びつけ、ジェット機で引き抜くことになりました。

町も村も大さわぎです。

どっちが勝つか？ みんなまよっていましたが、おおじやがいもの木は引き抜いてほしいし、王さまのごてんは、ギヤング団には、わたしたくはなかったからです。

裸になった王さまは、ひとびとの命の恩人として、したわれているようでした。

今日はその日で、見物席はいっぱいです。あふれた人々が、地上に寝ころんで空を見上げていました。

ジェット機に、乗り込むギャングの団長とパイロットが手をふっているのが見えていました。

「……………3、2、1、0！！」

人々の声がひびきわたり、旗がふり降ろされました。

ジェット機がカツソウロを、走り出しました。ポワンもアワンも息をつめていました。

だんだん速度をまし、おおじやがいもの木と結ばれた、ツナがどんどんはりつめていきます。つぎのしゅんかん、ジェット機は離陸していました。

「危ない！！」

だけれが、キケンを先取りして叫びました。

空中でジェット機とおおじやがいもの木の、綱引きがつづいていました。バランスがとれているのか、見物人には、つなを張ったジェット機が空の中ほどで、停止しているように見えました。

おおじやがいもの木は、地上に大きく枝をはって、しっかりと立っています。深く深く、広く広く、地茎を伸ばして、芋を太らせ、ジェット機の一機や二機で、引き抜けるとは、ポワンには、とても見えませんでした。

そのとき、人々が北の空を指さして、声をあげました。

「あれは、なんだ？」

そこにはでっかい、黒い球のようなものが、動いていました。それは時々形を変え、ひねった、蝶々みたいになっては、もとの球形にもどるのでした。

「鳥だ！！ 鳥のむれじゃ！！」

王さまがつぶやきました。

ジェット機と、おおじゃがいもの木の釣り合いが、くずれたのは、黒い鳥の大群が、ジェット機がけて襲い掛かったときでした。

鳥の大群はでっかいボールになって、ジェット機をかこんで飛んでいました。地上では、地震がきて、木の下に、割れ目ができ、おおじゃがいもの木はブルブル、身震いしながら、飛び立ちました。

「オ、オ、オー、オーオー、オー、オー、オーオーオー！！」

白い地茎の網み目を輝かせ、白い芋をかざって！！

青い空を、今、おおじゃがいもの木は、飛んでいました。

みんなの、目の上を、おおじゃがいもの木は、みどりの葉を広げ、横になって飛んでいきます。鳥の大群に引かれて、もう、遠くの空を飛んでいました。

見ると、黒い鳥の集団はいつのまにか、白い球になって飛んでいました。もう、すぐ、空に吸い込まれて、見えなくなりそうです。

「白い鳥だったんだ！！ きれいだなあ！！ おいものお母さん！！ バイ、バイ、バイバ

イ!!! バイバイ!!!」

村人たちは、町の人々は、なごりおしそうに手をふっています。

おいしいお芋の味がわすれられないでしょう。ポワンは思いました。

みんなは、夢からさめたように、かたつむりの王さまを探しました。

その時、王さまは ポワンに抱かれて、静かに、息をひきとりました。

午後三時だと、アワンが時計をみていいました。

おおじやがいもの木の、ひきぬかれた地上には、大きな穴と、落ちたジェット機のかげらが山をつくっていました。

人々は、泣いてはいましたが、ぐずぐずしてはいませんでした。なにをしなければならぬか、わかっていました。

みんなで、地割れを埋めることからはじめたんです。美しい村を、町を取戻すのです。

優しい、王さまに助けられたことを、忘れないために!!!

「きみだあれ！　王さまのごてんのなかに、無断で入って来て、きみだーれ？　そうだ、王さまの黄金ごてんをうばった悪ものに違いない！！　ピ、ピー！！」

王子は、するどい声をひびかせました。家来のかたつむりたちが、王子の護りをかためました。

「違うよ、違うよ。僕は、王さまと仲良しだったんです。王子さまに、これを届けてくれるようにって、たのまれたんだ！　王さまは、おおじやがいもの木の、引き抜かれた日、お亡くなりになりました！！」

王子の大きな黒い目が、見る間に、涙で山もりになりました。

「ああ、泣いちゃいけない！　涙がごてんのなかにたまったら、沈んでしまうぞ！　この池は、思ったより、流れが強い。海まで流されたいへんだ！！　きみを、王子さまを、ぼくたちは迎えにきたんだよ！　じゃがいも畑の住み心地は、どうでした？　王国にふさわしいと思いませんか？」

アワンが言いました。いつのまにかアワンは、よそゆきの服をぬぎすてて、裸で舟のカジをとっていました。

「ぼく泳げないんだもん。お兄ちゃんといたずらばっかし、していないで、泳ぎを真面目に練習したらよかったな！　でも、ぼくは海に流されても、とけることはないと思うけど？　王子さまはどうなのかな？」

ポワンは心配していました。

この池は地割れと、洪水で、海とつながってしまったのです。

歩いてじゃがいも畑に行けないことがわかったとき、リュックサックのなかの、王さまのごてんを、トケイ王みたいに舟にして、パパが助けられたように、王子を助けに行こう！ そう、いい出したのは、お兄ちゃんのアワンでした。

ポワンは心配になってきました。

「そうだ、塩分は、われわれかたつむりには、命とりだ！！」

アワンが真面目にっています。

「お兄ちゃん、いま、なんて言ったの？ われわれ、かたつむりって言わなかった？」

「ああ、そうか？」

アワンが不思議そうに、ポワンを見ました。

「ぴよんぴよん、ぴよーん。ケロップが、かたつむりを一匹ごてんにほうり込みました。

「さあ、これで、かたつむりくんは十一匹に、たす二匹だな！！」

ケロップがアワンとポワンの顔をのぞきこんで笑いました。ケロップまで、じょうだんがすきなんだから。ポワンも笑いました。

「ようし、そろったら、舟を出すぞ！！ みんなごてんに、つかまるんだ！！ いいか！！」

アワンがカジをきりました。ごてんはスピードをあげ、空を飛んでいくように滑っていきます。

じゃがいも畑が、右の岸にみどりのじゅうたんみたいに広がっていました。

「葉っぱがきれいだなあ。このあたり、おいもだけは、不思議にそだっているんだなあ。王子さまは、ここが、かたつむりの王国にふさわしいと思いませんか？」

ポワンもアワンにならって、泣き止んだ王子を真っ直ぐに見つめて聞きました。

「ああ、また、おおじやがいの木が根を張ったら、お手上げだから、ここは、われらの王国にふさわしくないと、きめたんだ。先祖の王国に帰ることにするよ！！ 岸についたら、ごてんはこの池に沈めていく！！ 捨てていくんだ！！」

王子が言いました。王さまの言葉をまだ伝えていなかったのに……。

「王さま喜ぶと思うなあ、同じこと王さまも、いつていたもん！！」

王子はもう泣いてはいませんでした。ポワンは、王子から世界に、青い、優しい風が広がっていったような気がしました。

戴冠式です。王子さまは、王さまになりました！！

カエルさんとかたつむりの合唱が、聞こえていました。うっとりするような歌声です。ポワンも自慢の鼻笛であわせました。

「あんまり長すぎないほうがいいよ。池の水が溢れると困るから！」

パパが笑っていました。

お祝いの言葉がつづいていました。町のひとたちが、カエルたちが、小鳥たちが、次々にお祝いの声を張り上げました。

「ぼくは、ずーと昔、ごてんをぬいだ、かたつむりです！！ ぼくは戦うことをしません。戦車も戦闘機もピストルも持っていません。でも、誰にも負けない勇気を子供たちに見ることができて、しあわせでした。これからの王国のために、アワンとポワンが、新しい王さまと一緒に、かたつむりの歩みでもいい、ゆっくりと、前進してくれることを信じています。みちびいて下さった、われらがトケイ王に、心からありがとうと申しあげます！！」

お礼の言葉を終えたパパが、ポワンとアワンを引き寄せ、そっと、キスをしました。

「それで、黄金のごてんは、どこにいったの！」

お姉さんが本当に心配になったのか、お庭に向かって走っていきました。

「あら、ぼっぼっぼっ、雨がふってきたわー！！」

「楽しいな！ ああ、うれしいなあ！」

「すごいなあ！！」

会場から、庭にながれた町の人たちが歓声をあげました。

「かたつむり王国 バンザーイ！！」

「かたつむり王国 バンザーイ!!!」

「トケイ王 バンザーイ!!!」

「トケイ王 バンザーイ!!!」

そのとき、かたつむり王国の王子さまの頭に、小さな王冠が光りました。

「さあ、戴冠式じゃ!!! おお、すばらしいぞ! 黄金ごてんなんぞ、なくなつて、立派な、立派な王さまじゃ!!!」

王さまの満足そうな声が、ポワンの耳で、ふるえていました。

おわり